

教科等と関連した展開例（小学校）

<展開例1>

1年 国語

「どうやってみをまもるのかな」（関連：特別活動）

■単元目標

- ・事柄の順序を考えながら内容の大体を捉え、分かったことを伝え合うことができる。

■指導計画

- 1 「どうやってみをまもるのかな」を通読する。動物について説明された文章を読み、書かれていたことを説明するという学習課題を確かめる。
- 2 文章全体を四つのまとまりに分ける。
- 3 それぞれの動物の身の守り方を読み取る。出てくる動物、体のつくり、身の守り方を対応させて読む。読み取ったことについて挿絵を使いながら説明する。
- 4 読んだ感想を交流する。

■【第5時】

- 1 全文を音読する。
- 2 読んだ感想を交流する。
- 3 自分自身について考える。

私たちは、大きな地震や台風から身を守るための体のつくりがありますか。

- ・あるのかな。
- ・ありません。

では、私たちは大きな地震や台風からどうやって身を守りますか。

- ・せんせいのはなしをしっかりきく。
- ・みんなで ちからをあわせる。

【防災教育の視点】

自然災害から身を守るために何が必要か、何に気をつけるかを考える。

<展開例2>

2年 算数

「三角形と四角形」「形をしらべよう」

「さんかくやしかくの形をしらべよう」(関連：特別活動)

■単元の目標

- ・ 図形に関わる数学的活動を通して、三角形，四角形について知り、図形を構成する要素に着目し、構成の仕方を考えるとともに、身の回りのものの形を図形として捉えることができる。

■【第9時】

- 1 四角形、三角形の定義について確認する。
- 2 身のまわりの四角形をさがす。

みんなの回りに四角形のかたちをしたものはあるかな。

 - ・ 生活の教科書も活用する。

これは、どんな意味があるのかな。(標識について)

 - ・ 安全にかかわる標識について確認する。
- 3 見つけたものを発表し合う。
- 4 見つけたものがなぜその形といえるのか、理由を説明する。

【防災教育の視点】

防災に関する標識について関心を高める。



<展開例3>

1年 生活

「がっこう だいすき」

■単元の目標

- ・学校探検や通学路探検を通じて、学校の施設の様子や学校生活を支えている友達、通学路の様子やその安全を守っている人々と自分との関わりを見つけ、学校生活を支えている人々や友達のことが分かるとともに、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全に登下校をしたりすることができるようにする。

■指導計画

- 1 みんなで通学路の一部を歩き、地域の人々や安全を守っている人々と触れ合い、安全な歩き方を知る。
- 2 安全を守っている人や施設について話し合う。

自分の通学路には、どんな人がいて、どんなものがあるかな。

■【第1時】

みんなで探検するときに、気をつけることは何かな。

- ・桜の木がいっぱいあるよ。
- ・見守り隊の人たちがいるよ。
- ・子ども110番の家があるよ。

みんなを守ってくれる人や物をたくさん見つけよう。

- ・整列して歩きます。
- ・勝手なことはしません。
- ・大きな声であいさつします。

■【防災教育の視点】

地域の中で安全を守っている人や安全のための施設について知り、危険を感じた時にどう行動すべきか考える。

<展開例4>

2年 生活

「どきどきわくわくまちたんけん」

「まちが大すきたんけんたい」

■単元の目標

- ・地域のさまざまな場所を訪問したり利用したりする活動を通して、地域の場所と自分との関わりを見つけ、地域にはさまざまな場所があり、人がいることや地域の場所が自分の生活と関わっていることに気づくとともに、地域の場所や人々に親しみをもち、適切に接したり、安全に生活したりしようとすることができるようにする。

■指導の留意点

まちたんけんで見つけたものを発表しよう。

- 1 見つけたことやその役割などについて振り返り、記録カードにかく。
- 2 まちたんけんマップに記録カードを貼る。

みんなのまちでも見たことがあるかな。

- ・ どんな音が聞こえたかな。
- ・ どんなにおいがするかな。
- ・ 何をあらわしているかな。
- ・ 絵や写真の中で見たことのあるものを発表しあう。

【防災教育の視点】

まちの中にある安全にかかわる物や施設について知り、危険を感じた時にどう行動すべきか考える。

<展開例5>

3年 算数

「長さ」「長い長さを表そう」「長い長さをはかって表そう」(関連：特別活動)

■単元目標

- ・量の単位と測定に関わる数学的活動を通して、長さの単位について知り、適切な単位で表し、単位の間係を統一的に考察することができる。

■〔やってみよう〕

- 1 標識について話をする。

この標識を見たことがありますか。どんな意味があるのかな。

- 2 標識に書かれた長さについて考える。

〇〇〇mは、何歩でいけるかな。また、何分かかかるかな。

- 3 実際に歩いてみる。

- 4 かかった歩数や時間について話し合う。



【防災教育の視点】

災害時避難場所までの距離や時間の感覚をつかむ。

<展開例6>

3年 算数

「長さ」「長い長さを表そう」「長い長さをはかって表そう」(関連：特別活動)

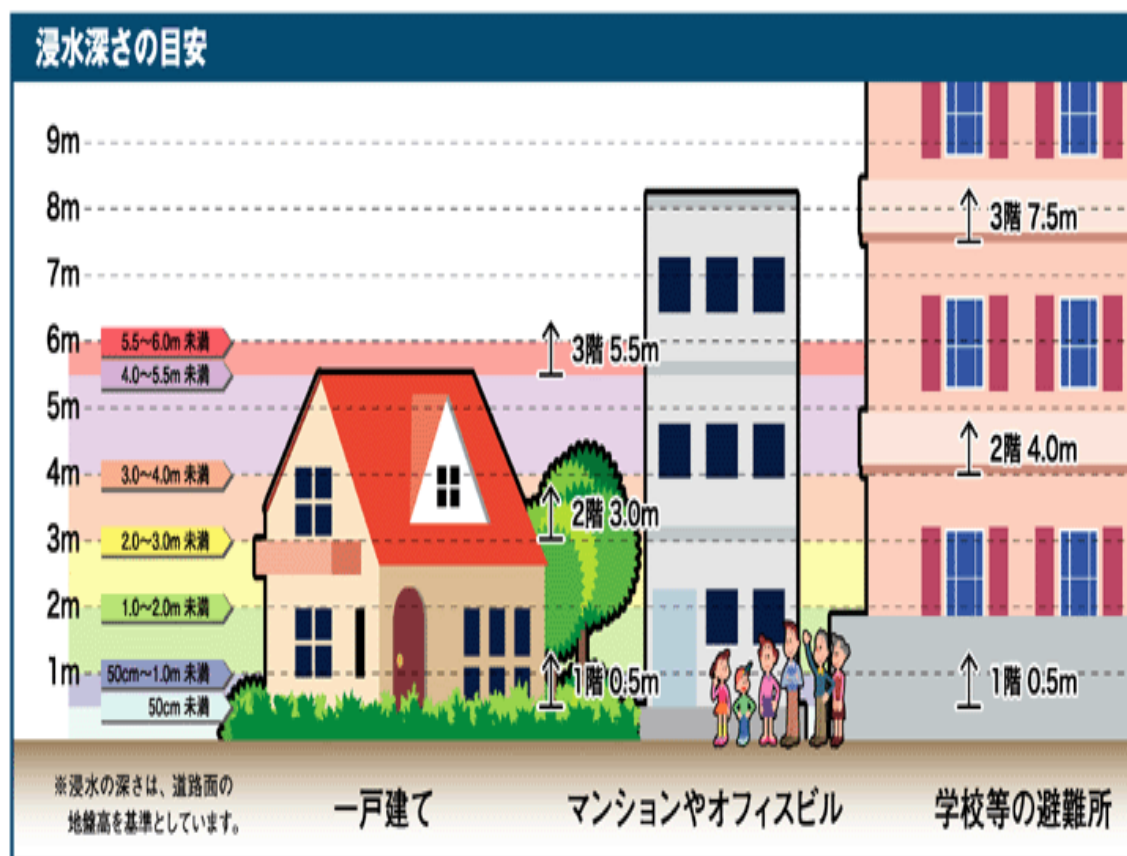
■単元目標

- ・量の単位と測定に関わる数学的活動を通して、長さの単位について知り、適切な単位で表し、単位の間関係を統合的に考察することができる。

■〔やってみよう〕

図の中に示されたいろいろな長さを実測して体感する。

津波の避難訓練では学校の3階以上に避難していますが、その7mや8mとはどんな高さなのかな。



【防災教育の視点】

津波の大きさを実感するとともに、津波発生時の行動について考える。

<展開例7>

3・4年 算数

「小数」「1より小さい数を表そう」「数の表し方やしくみを調べよう」

「小数のしくみを考えよう」「小数のしくみを調べよう」(関連：特別活動)

■単元目標

- ・小数とその表し方に関わる数学的活動を通して、端数部分の大きさを表すのに小数を用いることを知り、数のまとまりに着目し、小数でも数の大きさを比べたり計算したりできるかどうかを考えるとともに、小数を日常生活に生かすことができる。

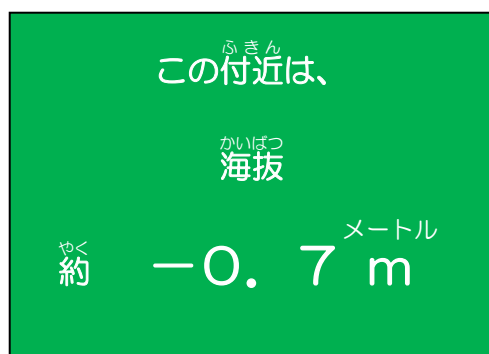
■「こんな数を見たことがあるかな？」

- 1 日常生活の中で、小数の表記がどこで使われているか話し合う。

「小数」は、どんなところに使われているか見つけよう。

- 2 持ち寄った具体物を観察しながら、なぜ小数が使われているのかを話し合う。

これは、どんな意味があるのかな。(標識について)



【防災教育の視点】

防災に関する標識について関心を高める。

<展開例8>

3年 理科

「風とゴムの力のはたらき」(関連：特別活動)

■単元の目標

- ・風とゴムの力と物の動くようすに着目して、それらを比較しながら、風とゴムの力の働きを調べる活動を通して、それらについての理解を図り、台風などの強風から身を守る方法について考えられるようにする。

■指導計画

- 1 風やゴムで、ものを動かしてみよう。
- 2 風が強くなると、風がものを動かす力は、どうなるのだろうか。
- 3 輪ゴムの引っ張る長さや、輪ゴムの本数を変えると、ゴムの力はどうなるのだろうか。
- 4 まとめよう／たしかめよう／力だめし ひろげよう (たこあげ合せん)

■【第1時】

- 1 風やゴムで遊んだことを思い出す。
- 2 台風による影響を考える。

風が強いときのかさの写真を見て、台風で、かさ折れて飛んでいってしまうのは、風速何メートルぐらいだと思いますか。

- ・ 実験では、大人の人が持っているかさが、風速 17 メートルで飛んでしまった。
- ・ 台風では、風速 50 メートルを超えることも珍しくない。風速 50 メートルでは、飛んだかさがガラスを突き破ってしまうほど危険である。

台風が近づいてきたら、気をつけることはあるかな。

- ・ 外へ出ない。
 - ・ 流れている水に近づかない。
 - ・ エレベーターを使わない。
 - ・ ベランダにある植木鉢、物干し竿など飛ばされる可能性があるものは、室内に取り込んでおく。
- 3 風で動かせそうなもの考える。
 - 4 「帆」をつけた車をつくる。

■【防災教育の視点】

自然災害について知り、自らの身を守ることができる。

<展開例9>

4年 社会

「くらしを守る」「自然災害からくらしを守る」

「安全なくらしを守る」「自然災害から人々を守る活動」(関連：学校行事)

■単元の目標

- ・地域における災害・事故防止について意欲的に調べ、地域社会の一員として態度を育てる。
- ・関係諸機関が相互連携して緊急体制を取っていることを調べ、人々の工夫や努力を考える。

■指導計画

- | | |
|----------------|-------------------|
| 1 火事について調べよう | 2 学校の消防せつびを調べよう |
| 3 消防署の仕事を調べよう | 4 地域や家庭の取り組みを調べよう |
| 5 おそろしい地震 | 6 地震へのそなえを調べよう |
| 7 災害から地域を守るために | 8 地域の安全のこれから |

■【第6時】

- 1 身のまわりにある地震の備えについて話し合う。
- 2 学校や地域にある地震に備えるための施設や設備を調べる。
- 3 災害から身を守る知識や方法と、それを伝え広めることの大切さについて考える。

学校や地域は、地震に備えてどのような取り組みをしているのかな。

- ・ 地震に備えて体育館の天井や校舎の耐震工事をしているよ。
- ・ 学校の防災備蓄倉庫を見せてもらったよ。毛布や水や食料や簡易トイレがあったよ。
- ・ 校門の前には、災害時避難所と書いてあるよ。
- ・ 大きな道路には、広域避難場所という案内板があるよ。

わたしたちは調べて初めて知ったけれど、地域の人々は知っているのかな。

- ・ 施設や設備だけでなく、使い方とか、助け合いも大切だと思う。
- ・ 命を守る取り組みを伝えたり広めたりして、みんなが知っていなければいけない。

- 4 府や市、学校や地域の地震などの災害に対する備えについて話し合う。

【防災教育の視点】

関係機関が地域と協力して震災に対する備えに努めていることを理解する。

<展開例 10>

5年 社会

「日本の国土と人々の暮らし」「国土の環境を守る」
「わたしたちの国土」「わたしたちの生活と環境」

■単元の目標

- ・地震や津波、風水害などの自然災害の様子と、国や府の対策事業を調べる。
- ・自然災害と国土環境の関連や、国民一人一人の防災意識を高めることの大切さを考える。

■指導計画

- 1 自然災害が多い日本
- 2 自然災害と人々の暮らし
- 3 自然災害に強いまちづくり
- 4 防災家族会議を開こう

■【第4時】

- 1 自分たちでできる災害への備えについて話し合う。
- 2 既習事項をもとに防災家族会議で話し合う内容について話し合う。

災害への備えについて、家族でどのような話し合いをしなければいけないだろうか。

- ・ 1人1人で確認すること・・・災害の恐ろしさ、防災に関する知識 など
 - ・ 家族で確認すること・・・ハザードマップ、避難経路、避難場所、集合場所、
備蓄物資、災害伝言ダイヤル、家具設備点検など
 - ・ 地域にはたらきかけること・・・近所とのつながり、避難訓練への参加 など
- 3 防災家族会議で話し合う内容のチェック項目を表にまとめる。
 - 4 防災家族会議チェック表を発表することで、市民一人一人の防災や減災への関わりの大切さについて話し合い、実際に各家庭で防災家族会議を開く。

【防災教育の視点】

これまでの防災学習をふりかえり、学んだ防災に関する知識を実践に生かそうとする意欲や態度を育てる。

<展開例 11>

5年 算数

「割合のグラフ」「割合をグラフに表そう」

「割合をグラフに表して調べよう」(関連：特別活動)

■単元の目標

- ・資料における数量の比較や全体や部分の関係の考察などで割合を用いる場合があることや、その表し方についての百分率について理解するとともに、資料を円グラフや帯グラフを用いて表したり、特徴を調べたりすることができるようにする。

■指導計画

- 1 割合の意味を理解し、比較量と基準量から割合の求め方を理解する。
- 2 百分率や歩合の意味とその表し方を理解する。
- 3 比較量、基準量、割合の関係を理解する。
- 4 帯グラフや円グラフの読み方や特徴を理解し、かき方を理解する。
- 5 グラフから割合や絶対量を読み取り、問題を解決する。

■【第9時】

- 1 「災害が起こる前に用意しておきたいもの」についてのアンケート結果を見て、気づいたことを話し合う。
- 2 本時の課題を確認する。

円グラフや帯グラフに表そう。

 - ・それぞれのグラフの特徴を確認する。
- 3 割合をグラフに表す。
 - ・それぞれのグラフの表し方のきまりを一緒に確認する。
 - ・特徴がとらえやすいように工夫するよう助言する。

《準備物》「災害が起こる前に用意しておきたいもの」アンケート

(事前に学級活動等でクラスアンケートを行っておく)

【防災教育の視点】

災害時に必要なものを自ら考えるとともに、友達の見解も知ることによって災害に対する意識を高める。

<展開例 12>

6年 社会

「自然災害からの復旧や復興の取り組み」
「アジア・太平洋に広がる戦争」「新しい日本のあゆみ」
「震災復興の願いを実現する政治」「世界に歩みだした日本」
「新しい日本、平和な日本へ」

■単元の目標

- ・政治の働きに関心を持ち、具体的事例をもとに調べたり、民主政治について考えたりする。
- ・地方公共団体や国の政治は、国民の願いを実現し国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていることを理解する。
- ・国民生活に政治の働きが反映していることや、日本国憲法が国家や国民生活の基本を定めていることを調べ、生活と政治の関連について広い視野から考えたり表現したりする。

■指導計画

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1 東日本大震災の被害 | 2 被災した人への緊急の支援 |
| 3 まちの復興に向けた取り組み | 4 住民の願いと政治の働き |
| 5 市民の願いと税金のはたらき | 6 選挙と政治 |
| 7 国会のはたらき | 8 内閣のはたらき |
| 9 裁判所のはたらき | 10 三権分立とわたしたちの暮らし |
| 11 政治と私たちの関わり | |

■【第5時】

- 身近な暮らしに税金が役立っていることについて話し合う。
- 税金はどのように納めて、どのように使われているかを資料で調べる。
- 税金の使い道の特徴と、税の役割について考える。

調べた税の使い道を色分けして、税が大切な理由について自分の考えを発表し合おう。

- ・住民一人一人が健康で豊かな生活を送りたいという願いをもっている。
 - ・安全、安心、健康な暮らしが重視されている。
 - ・自然災害などの緊急事態への対応や支援にも、住民が納めた税が使われている。
 - ・国民の命を守るために、税金はとても大切。
 - ・みんなが納めた税なので、計画的に大切に使うことが必要である。
 - ・税の使い道についてしっかり考えたり、勉強したりしなければいけない。
- 税金の役割と、税金の使い方を決める市会について話し合う。

■【防災教育の視点】

自他の生命を尊重し、災害発生時や発生後に地域の安全に役立つ「公助」の観点から、納税の義務の意味を考える。

<展開例 13>

6年 算数

「わくわく SDGs」「マテマランドを探検しよう」「算数 卒業旅行」

【水害に備えようプロジェクト】(関連：特別活動)

■単元の目標

- ・既習事項を活用して、表やグラフを考察し、必要な情報を選び水害に関する課題を解決する。
- ・水害の対策について話しあい、課題解決に向けた計画を考えることができる。

1 本時の課題をとらえる。

水害に備えてできることを考えよう。

- ・避難場所までの道のりや降水量について調べよう。

2 1ーアの問題を解決する。

1/5000 の地図上で、家から避難場所までの道のりが 10 cm だったとき、実際の道のりは何 m かな。

- ・ (式) $10 \times 5000 = 50000$ (答え) 500m
- ・ 歩くと何分くらいかかるかも調べたいね。

3 1ーイの問題を解決する。

1 時間あたりの最大の雨の量が「非常に激しい雨」のときや「もうれつな雨」のときの回数は何回かな。

(表より)

- ・「非常に激しい雨」は、熊本市で 26 回、神戸市で 6 回、千葉市で 10 回、札幌市で 0 回。
- ・「もうれつな雨」は、熊本市が 3 回、神戸市、千葉市、札幌市は 0 回。

4 1ーウの問題を解決する。

1 時間あたりの最大の降水量のちらばりのようすをヒストグラムに表して、比べよう。

- ・ 降水量のちらばりの様子が違うから、地域によってとるべき対策も変わりそうだ。

5 1ーエの問題を解決する。

調べてわかったことをもとに、水害に備えるためにできることについて話しあおう。

- ・ 大雨の情報はどのように手に入ればよいのかな。
- ・ みんなで助けあうための備えもあるのかな。

【防災教育の視点】

水害に関する資料から必要な情報を選択し、水害への備えについて考える。

教科等と関連した展開例（中学校）

＜展開例 14＞

1年 国語

「複数の情報を関連づけて考えをまとめる」 P.146～P.157

■単元の目標

- ・比較や分類、関係づけなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の出し方について理解を深め、それらを使うことができる。
- ・読み手の立場に立って、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができる。

■指導計画

【第1時】

防災訓練の案内リーフレットを作成するという学習の見通しを立て、防災に関する資料Aのグラフをふまえて、人々の行動の課題を考える。

【第2時】

資料Bの文章を読み、複数の人と一緒にいるときの心理傾向について読み取り、災害時にとるべき行動について筆者の意見を捉える。

【第3時】

資料Aと資料Bを関連づけて、地域の人々に防災意識を高めてもらうために大切なことについて考える。

【第4・5・6時】

3の学習をもとに、リーフレットに掲載する内容を決め、それにそった情報を集めてグループで情報を共有する。

【第7・8時】

6の学習をもとに、集めた情報をリーフレットにまとめ、まとめた内容を読み手の立場に立って読み返しながら、表現や表記などを工夫する。

【防災教育の視点】

災害時における人々の行動や日常の防災意識について、複数の資料から読み取れることをもとに考え、グループで対話を重ねたりすることで、実際の災害時に自分自身がどう行動すべきかや日常から災害に対してどのように備えておくべきかについて考えさせる。

<展開例 15>

1 年 数学**数学の自由研究 「地震のゆれの予測のしくみ」 P.288****■単元の目標**

- ・ 具体的な事象を調べることを通して、比例、反比例についての理解を深めるとともに、関数関係を見いだし表現し考察する能力を培う。
- ・ P 波、S 波が観測されるまでの時間と震源からの距離の関係について説明できる。

■【第1時】

- 1 地震のゆれの大きさと伝わり方について確認する。
 - ・ 初期微動を伝える（小さなゆれ）…P 波、主要動を伝える（大きなゆれ）…S 波について。
 - ・ P 波と S 波は同時に発生する。観測地にまず P 波が到達し、その後 S 波が到達する。
- 2 本時の課題をとらえる。

東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）での各地の地震計の観測データからどんなことが分かるか。

- ・ 距離は時間にほぼ比例する。
 - ・ P 波、S 波は一定の速さで伝わる。
- 3 グラフを活用し、S 波がくるまでの時間について考察する。

震源から 150 km 地点で P 波を観測したとき S 波が到達するまでの時間を求める。

- ・ 約 20 秒後に S 波が到達する。
- 4 類似問題を提示し、考察する。

【防災教育の視点】

ゆれの大きさや伝わり方の規則性に気づくことで地震への理解を深め、備えができる。

<展開例 16>

1 年 技術家庭【技術分野】

「丈夫な製品を作る工夫」 P.52～P.53

■単元目標

- ・ 丈夫な製品を作るための技術の工夫について理解する。

■指導計画

- 1 建物を丈夫にし、地震に耐えるためにはどうすればよいかを話し合う。
- 2 さまざまな条件の中で、構造と部品を丈夫にすることを取り上げ、その方法を考える。
- 3 構造を丈夫にする基本的な方法を 3 つ示し、それぞれボール紙で模型を作って丈夫さを比較してみる。
- 4 部品を丈夫にする基本的な方法を 3 つ示し、それぞれボール紙などを用いて丈夫さを確かめる。
- 5 学校や通学路、自宅などで、3 や 4 のような工夫があるかどうか話し合う。

【防災教育の視点】

建物の耐震構造について理解し、震災に耐えられるように準備する。

3 年 技術家庭【家庭分野】

「地域での協働を目指して」（東書） P.264～P.267

「かかわり合う地域と家庭」（開隆） P.76～P.81

■題材目標

- ・ 家庭や地域の人々とともに協力・協働することの大切さを理解する。

■指導計画

- 1 地域の人（子どもや高齢者、心身に障がいのある人、外国人など）とのかかわりについて話し合う。
- 2 地域の自治会や NPO などの団体とのかかわりについて話し合う。
- 3 地域との避難訓練を例にあげ、中学生と地域とのかかわりを話し合い、協力して活動したり、助けあったりしていることを理解する。

【防災教育の視点】

災害時に中学生ができる共助について考える。

<展開例 17>

1・2・3年 特別活動

「避難所づくり、避難所運営を体験し、避難所生活の課題を検討しよう。」

■単元目標

- ・避難所を設置する際の手順や避難所生活の課題を理解し、課題解決に向けて協力して取り組む態度を身につける。

■指導計画

- 1 避難所運営委員会から避難所運営のルールや設置の手順について説明する。
- 2 避難所運営委員会の指示で体育館に簡単な避難所を設置する。
 - ・机や椅子、段ボールなどを使って居住スペースをつくる。
 - ・さまざまな配慮を必要とする者への配慮スペースを考える。
 - ・災害備蓄品のチェック、非常時持ち出し品の確認。
- 3 参加者の中で避難してくる人と運営する人などの役割分担をする。
- 4 避難者の受付作業、情報収集、避難所への誘導、応急手当の方法などを体験する。
- 5 いくつかの班に分かれて、避難所生活のシミュレーションをする。
 - ・避難当日の地震の震度、気象条件、季節、時間、被災状況、避難者の様子等を設定して予測される課題をいくつか考え、解決策を検討する。
 - ・防災マップを活用して、予想される被害や課題の解決策を検討する。
- 6 全体で課題や解決策、感想などを発表しあう。

【防災教育の視点】

区役所や地域の役員と連携し、中学生としての避難所運営への参加と避難所生活の課題を考える。

<展開例 18>

2年 社会（地理的分野）

「日本の地域的特色」 P.140～P.164

■単元の目標

- ・日本の地形や気候の特色、海洋に囲まれた日本の国土の特色、自然災害と防災への取組を基に、日本の自然環境に関する特色を理解している。
- ・日本の地域的特色を、地域区分などに着目して、それらを関連付けて多角的に考え考察し、表現している。
- ・日本の地域的特色と地域区分について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

■指導計画

- 1 山がちな日本の地形
- 2 川がつくる地形と海岸や海洋の特徴
- 3 日本の気候
- 4 日本のさまざまな自然災害
- 5 自然災害に対する備え
- 6 日本の人口
- 7 日本の資源・エネルギーと電力
- 8 日本の産業
- 9 日本の交通網・通信網
- 10 日本の地域区分

■【第5時】自然災害に対する備え（P.148～P.151）

- ・「日本のさまざまな自然災害」について前時の復習をする。
→日本にはどのような自然災害が多いのか。（地震・火山・津波・集中豪雨・高潮など）
- ・日本では「防災」や「減災」のために、どのような取組が行われているのだろうか。
→東日本大震災を教訓に、どのような対策が行われたのかを確認する。
→災害発生時には「公助」に加えて、自分自身や家族を守り、また住民同士が協力して助け合う「自助」や「共助」といった行動が重要であることを確認する。
- ・ハザードマップを通じて、自分たちが住む町にはどのような被害が想定されるのかを予測する。また、根拠を踏まえて避難先や避難ルートを考え、お互いの意見を交流する。

【防災教育の視点】

ハザードマップの読み取りを通じて、自分たちが住む町で想定される被害を把握し、その際にどのような行動をとるべきかについて主体的に考えることができる。

<展開例 19>

2・3年 美術 【デザインや工芸など】

【表現・鑑賞】「わかりやすく情報を伝える」（光村）美術2・3 P.76～P.77

【鑑賞】「防災のデザイン」（光村）美術2・3 P.82～P.83

【表現・鑑賞】「ひと目で伝わるみんなのデザイン」（日文）上 P.40～P.41

■単元目標

- ・ピクトグラムのデザインに関心を持ち、非常時に伝えたい内容などを基に主題を生み出し、形や色彩などによる伝達の効果を考え、見通しを持って防災のピクトグラムをデザインし表す。

■観点別目標

- 1 具体物や行為を表す形の特徴などに着目し、伝達のイメージをとらえ、絵の具などの特性を生かし、見通しを持って表す。
- 2 伝えたい内容やイメージ、伝える場面などをもとに、形や色彩による伝達の効果を考え、構想を練ったり鑑賞したりする。
- 3 ひと目で伝わるピクトグラムなどをデザインすることに関心を持ち、意欲的に取り組む。

■指導計画

- 1 **【光村】** 防災のためにデザインされた作品に関心をもち、作者の工夫や、防災におけるデザインの役割について考え、見方や感じ方を深める。
【日文】 身の回りにあるサインやピクトグラムを調べ、災害時にどのようなピトグラムがあれば、皆が安全に避難することができるかを考える。
 - ・ピトグラムは伝えたいことを文字に代わって視覚的な図や絵で表現した視覚記号である。
 - ・国際的な場や公共空間で使用され、言葉の違う人々や文字の読めない子どもたちにも直感的に情報を伝えることができる。
- 2 校内や身近な場所に活用できるサインやマークを基に、災害時に瞬時に正確な情報を伝えるピトグラムを構想し、アイデアスケッチをする。
 - ・どのような場所で、どんな災害かを基に、多くの人々に必要な情報が伝わり、共通に認識できるピトグラムの構想を練る。
 - ・ひと目で伝わり、場所や目的に合ったデザインであるか互いに批評し合い、アイデアを再検討する。
- 3 主題を基にどのような形や色を使えば効果的なのかを考え、その特徴を生かした効果的な表現方法を工夫し、見通しを持って作品を制作していく。
- 4 災害時における伝達の観点から互いの作品を鑑賞し合い、よさや美しさ、表現の工夫などについて話し合う。

【防災教育の視点】

災害時に効果的なピトグラムを考え、作品を制作していくことで災害に対する意識を高める。

<展開例 20>

2年 保健体育

「自然災害による危険」「自然災害による傷害の防止」「共に生きる」
 「応急手当の意義と方法」「心肺蘇生法」 P.76～P.85

■単元の目標

- ・ 傷害の発生要因およびその防止について、課題を発見し、その解決をめざした学習に主体的に取り組み、理解できるようにする。

■指導計画**【第1時】**

「自然災害による危険」(P.76～P.77)

地震などの自然災害による傷害は、発生直後に起こる一次災害、続いて起こる二次災害の防止が必要であることを理解できるようにする。

【第2時】

「自然災害による傷害の防止」(P.78～P.79)

地震などの自然災害による傷害を防止するためには、災害に備えた安全対策や災害時の安全な行動が必要であることを理解できるようにする。

「共に生きる」(P.80～P.81)

大きな災害が起こったときには、心に大きな傷を受けたり、避難所生活などを強いられたりするため、自助、共助、公助などが必要であることを理解できるようにする。

【第3時】

「応急手当の意義と方法」(P.82～P.83)

傷害による出血や骨折などの際には、迅速かつ適切な手当が傷害の悪化を防止できることなどについて理解し、止血法や包帯法ができるようにする。

【第4時】

「心肺蘇生法」(P. 84～P.85)

心肺停止に陥った人に遭遇したときの応急手当として心肺蘇生法があることとその方法について理解し、胸骨圧迫、AED 使用などの心肺蘇生法ができるようにする。

【防災教育の視点】

自然災害による危険や傷害の防止、応急手当の意義や方法、心肺蘇生法などを学ぶ。

<展開例 21>

3年 理科

「2 自然が人間の生活におよぼす影響」(啓林) P.282～P.287

(参考)「自然災害と地域のかかわりを学ぶ」(東書) P.272～P.275

■単元の目標

- ・地域の自然災害を調べ、大地の変化の特徴を理解し、自然を多面的、総合的に捉え、自然と人間との関わり方について、科学的に考察して判断する能力や態度を身に付けさせる。

■指導計画

- 1 日本付近で発生する自然災害
- 2 地域の自然災害
 - ・地域の自然災害の調査

■【第2時】

○自分が住む地域における自然の特徴と生活とのかかわりを調べる。

- 1 地域の自然の特徴を調べる
 - ・地形図などをもとに、生活している地域の特徴を調べまとめる。
- 2 過去の自然災害と防災・減災の取り組みを調べる
 - ・地域で起こった地震、火山の噴火、台風、洪水などによる自然災害を調べる。

地域で起こった自然災害にはどのようなものがあったか。また地域の自然の特徴とどのような関係があるか。

- ・自然災害から身を守る防災・減災の取り組みや備え、ハザードマップなどについて調べる。

自然災害から身を守る防災・減災の取り組みや備えにはどのようなものがあったか。またハザードマップと地域の自然の特徴とはどのような関係があるか。

■【防災教育の視点】

過去の災害と地域の自然の特徴について調べ、防災・減災の手立てや備えについて考える。

<展開例 22>

3年 英語

「Unit 4 “How can we help each other in a disaster?”」(東書) P.51～P.58

■単元目標

- ・防災・安全への意識を高め、地域の一員として取るべき行動を考えて伝え合うことができる。

■指導計画

【第1時】

- 1 関節疑問文の構造を理解する。
- 2 緊急事態が起きた時、学校ではどうすればよいのか考えさせる。また学校の非常階段や非常口の場所を知っているかどうかをペアで伝え合う。

【第2時】

- 1 東日本大震災について知っていることについて話し合う。
- 2 動詞＋(人)＋whatなどで始まる節の構造を理解する。
- 3 ディスコースマーカーに着目しながら本文の概要を時系列で捉える。

【第3時】

- 1 再度、本文を読み、Q&Aに答えて内容を理解する。
- 2 おたがいの好きな有名人や身のまわりの人について知るために、その人がどのような人に愛されているかをペアで伝え合う。

【第4時】

- 1 Unit Activity の「防災のためにどんな助け合いができるか伝え合おう」や「テイラーさんのストーリーと、防災への取り組みについて発表しよう」を通し、この Unit で学んだ文法事項や内容の定着を図る。

【防災教育の視点】

災害発生時における対応とともに、災害の記憶を引き継ぐために何ができるかを考える。

<展開例 23>

3年 道徳**「二通の手紙」****■単元目標**

- ・法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、秩序と規律のある社会を実現しようとする態度を育てる。
- ・法やきまりのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にする態度を育てる。

■指導計画

1 資料の精読

- ・登場人物それぞれがおかれた状況はどうであったか。
- ・元さんは、なぜ、規則を破ってまで姉弟を入園させたのだろうか。
- ・姉弟を入園させたことで、どのようなことが起こったか。
- ・母親からの手紙はどのような内容だったか。
- ・懲戒処分のお知らせはどのような内容だったか。
- ・二通の手紙を読んだ後、元さんはどのような行動をとったか。

2 中心発問1について考える。

例「その手紙を元さんは何度も何度も繰り返し読んでいた。」(P.142)のはなぜか？

3 中心発問2について考える。

例「元さんの姿に失望の色はなかった。それどころか、晴れ晴れとした顔で身の回りを片づけ始めたのだった。」(P.144) 懲戒処分のお知らせを受けて、なぜ晴れ晴れとしているのか？

4 この学習を通して、感じたことや考えたことを発表しあう。

- 例・自分が元さんの立場だったなら、このようなとき、どのように対応すると思うかについて話し合う。
- ・法やきまりはなぜあるのか、それを破ることでどのような問題が起きるのかについて話し合う。

5 家族や地域の方々にも学習の内容を説明し、自分の意見を述べ、それらの方々の意見を聞いてくる。

【防災教育の視点】

被災後の生活や、避難所での生活において、他の被災者のことを考えながら、ルールを守って生活していく意識を高める。

防災・減災教育（避難訓練を含む）実践事例

実践事例 1

1. 対象・・・幼稚園
2. 指導計画作成にあたっての留意点
 幼児期の発達に合わせて、恐怖心をもたせることのないように配慮し、幼児一人一人が落ち着いて安全に行動できるように、具体的な行動の仕方を理解させるように工夫する。
3. 目標
 ○ 地震のときに起こりうる事態を具体的に知り、どのようにしたらよいかを知る。
 ○ 大人の指示をしっかりと聞き、行動できるようにする。
 ○ 危険な状態を発見したときは、身近な大人に速やかに伝えることができるようにする。
4. 関連領域 健康、人間関係、環境、言葉
5. 指導計画（指導の流れ）

幼児の主な活動	援助及び指導上の留意点
1.命の大切さ、友達と仲良く遊ぶ楽しさなどを話し合う ○自然の大きさ、美しさ、不思議さ。 ○友達と楽しく生活したこと。 ○身近な動植物とのふれあい体験による、生命の尊さへの気付き。	・日頃の保育活動の中で、十分に体験させておくことが大切である。
2.地震が起こったらどうなるの ○地震について知っていることを話し合う。 ○地震についての話を聞く。	・経験したことやテレビで見たことをもとに話し合うようにする。 ・恐怖心を与えないようにする。 ・絵本や紙芝居、ビデオなど発達段階にあった資料を活用する。
3.地震が起こったらどうしたらいいの ○保育室や園庭など園内の危険な箇所について考える。 ・落下物 ・転倒の危険 ・倒壊の危険 等 ○避難の仕方を考える。 ・一時退避場所、方法 ・避難経路 ・避難の時の態度 ・危険な状況を見つけた時の対応 等	・様々な危険について、具体的に確認しながら考えるようにする。 ・保育室、園庭、遊戯室などそれぞれで具体的にしてみるようにする。 ・落下物などに気を付け、頭を保護するようにする。 ・指示を聞くことが大切だと知らせる。 ・落ち着いて行動することが大切であることを知らせる。
4.家の人とも話してみよう	・防災指導をした日は、お迎えのときなどに、内容を保護者に伝え、家でも子どもの話を聞き、話し合っ、地震が起こったときにどうしたらいいか考えてもらう。

実践事例 2

幼稚園

日時	令和○年○月○日（○） ○時○分	
災害の想定	午前○時○分に強い地震が発生。各クラスとも保育室でクラスの活動をしている。保育室から安全な場所へ避難する必要がある。	
ねらい	・地震のときに起こりうる事態を具体的に知り、大人の指示をしっかりと聞き、行動できるようにする。	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○地震について話し合う。 ・幼児が知っていること。 ・地震についての話をする。 ・保育室や園庭など園内の危険な個所について考えるようにする。 （落下物、転倒の危険、倒壊の危険等） ○避難訓練について話し合い、以下のような点を確認する。 ・頭を保護するために、小さくなって頭を守る。 ・揺れがおさまるまで待つ。 ・しっかり話を聞く。 ・避難の合図の音を聞き、上靴のままで避難する。 ・本で行うのは訓練であることを伝える。	・経験したことやテレビ等で見たことをもとに話し合えるようにする。 ・恐怖心を与えないようにする。 ・絵本や紙芝居、ビデオなど発達段階にあった資料を活用する。 ・頭を保護し、指示があるまで待つことを知らせる。 ・「おさない・はしらない・しゃべらない」（お・は・し）を守って避難できるようにする。 ・配慮を要する幼児の避難方法については、教職員間で十分に共通理解をはかる。
2. 地震の発生	○指示 「しずかに」 「おちついて」 「小さくなって頭を手で守りましょう」 ○措置 ・出入り口を開ける。 ・電源を切る。 ・ガスの元栓を閉める。（冬季）	・大きな声ではっきりと指示する。 ・幼児の行動を把握し、落ち着かせる。 ・頭部の安全について指示をし、特に窓やピアノ、棚の近くの幼児には、保育室の真ん中に寄るように指示する。
3. 避難の合図（放送）	○指示 「けがはありませんか」 「今から園庭に避難します」 「上靴のままで避難します」	・負傷者の有無の確認をする。 ・頭を保護するものが身近にあれば活用する。 ・避難方法を明確に指示する。

4. 人員確認 5. まとめ	「廊下に静かに並びましょう」 「頭の上に気をつけて、走らないで先生の後についてきなさい」 ※火災発生時 「口と鼻をハンカチで覆って避難しなさい」 ○指示 「ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」 ○園長先生の話	・隣接のクラスと協力して、素早く安全に避難できるようにする。 ・人員確認を行い、保育室に誰も残っていないか確認する。 ・担任は人員確認を行い、速やかに本部に報告する。 ・良かった点や注意する点等、話をする。
------------------------------	--	---

《その他の留意点》

- 建物崩壊・倒壊などの危険もあるので、避難誘導の際には、様々な被害想定に基づいて計画を立てて実施する。
- 季節や9月1日の「防災の日」、1月17日「防災とボランティアの日」の行事などの関連及び地域の取組や実態を考慮して、訓練の計画を立てる。
- 災害時における幼児の心身のケアについて事前に研修を行っておく。
- 災害に備え、家庭との連絡体制を確立しておく。
- 家庭でも、普段から災害に備え、いざというときの心構えについて確認しておくことの大切さを啓発していく。

実践事例 3

幼稚園

日時	令和○年○月○日（○） ○時○分	
災害の想定	午前○時○分（好きな遊びをしている時）に強い地震が発生。安全な場所へ避難する必要がある。	
ねらい	地震のときに起こりうる事態を具体的に知り、大人の指示をしっかりと聞き、行動できるようにする。	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○地震について話し合う。 - 幼児が知っていることを伝え合う。 - 地震についての話をする。 - 保育室や園庭など園内の危険な個所について考えるようにする。 （落下物、転倒の危険、倒壊の危険等） ○避難訓練について話し合い、以下のような点を確認する。 - 室内で活動していた場合、電灯、ピアノ、窓から離れる。 - 園庭で活動していた場合、樹木や建物から離れる。 - 揺れがおさまるまで、姿勢を低くして頭を守って待つ。 - 避難の合図の音を聞き、室内にいた場合は上靴のままで避難する。 - 近くにいる先生の話をしっかり聞く。 - 本で行うのは訓練であることを伝える。	- 経験したことやテレビ等で見たことをもとに話し合うようにする。 - 恐怖心を与えないようにする。 - 絵本や紙芝居、ビデオなど発達段階にあった資料を活用する。 - 頭を保護し、指示があるまで待つことを知らせる。 - 場所によって、避難の仕方が異なることを、確認する。 「おさない・はしらない・しゃべらない」（お・は・し）を守って避難する。 - 配慮を要する幼児の避難方法については、教職員間で十分に共通理解をはかる。
2. 地震の発生	○指示 「しずかに」 「おちついて」 「小さくなって頭を手で守りましょう」 ○措置（室内） - 出入り口を開ける。 - 電源を切る。 - ガスの元栓を閉める。（冬季）	- 近くにいる幼児に対して大きな声ではっきりと指示する。 - 幼児の行動を把握し、落ち着かせる。 - 頭部の安全について指示する。 - 室内にいる幼児には、窓やピアノ、棚の近くから離れ、保育室の真ん中に寄るように指示する。 - 園庭にいる幼児には、建物や木のそばから離れ、まわりに何もいないところに移動するよう指示する。
3. 避難の合図（放送）	○指示 「けがはありませんか」	（室内） 避難方法を明確に指示し、近くの幼児

	「今から園庭に避難します」 「上靴のままで避難します」 「廊下に静かに並びましょう」 「頭の上に気をつけて、走らないで先生の後についてきなさい」 「園庭の真ん中に集まりなさい」 ※ 火災発生時 「口と鼻をハンカチで覆って避難しなさい」	を素早く安全に避難させる。 (園庭) ・各保育室の子どもたちの状況を確認しながら、園庭へと避難させる。 ・負傷者の有無の確認をする。 ・頭を保護するものが身近にあれば活用する。 ・教師間で協力して、素早く安全に避難する。 ・先に避難してきた子どもから、組ごとに並べるように誘導する。 ・それぞれの幼児の行動範囲を把握しておき、特に、室内に残っている幼児がいなか確認する。 ・人員確認を行い、園舎裏など死角になるところや保育室に、誰も残っていないか確認する。
4. 人員確認	○指示 「ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」	・担任は人員確認を行い、速やかに本部に報告する。
5. まとめ	○係の話 ・避難時の行動の態度や避難の所要時間について話をする。 ○園長先生の話	・全幼児の安全確認を行い、「おさない・はしらない・しゃべらない」が守れたか、安全に気を付けて避難できたかなどについて話をする。 ・良かった点や注意する点等、話をする。

《その他の留意点》

- 幼児の好きな遊びの場所や行動範囲を把握しておくとともに、幼児には、担任の教師だけでなく、園のすべての職員の指示を聞いて行動できるように指導しておく。
- 建物崩壊・倒壊などの危険もあるので、避難誘導の際には、様々な被害想定に基づいて計画を立てて実施する。
- 季節や9月1日の「防災の日」、1月17日「防災とボランティアの日」の行事などの関連及び地域の取組や実態を考慮して、訓練の計画を立てる。
- 災害時における幼児の心身のケアについて事前に研修を行っておく必要がある。
- 災害に備え、家庭との連絡体制を確立しておく必要がある。
- 家庭でも、普段から災害に備え、いざというときの心構えについて確認しておくことの大切さを啓発していく。

実践事例 4

幼稚園

日時	令和○年○月○日（○） ○時○分	
災害の想定	午前○時○分（好きな遊びをしている時）に強い地震が発生。地震による津波発生の可能性があり、安全な場所へ避難する必要がある。避難した場所に保護者に引き取りにきてもらう。	
ねらい	・地震のときに起こりうる事態を具体的に知り、大人の指示をしっかりと聞き、自分で判断して行動できるようにする。	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○保護者に対して○時に強い地震が発生したと想定して、引き取り訓練をすること、また徒歩で安全な道を通って帰宅することを伝える。 ○地震について話し合う。 ・幼児が知っていることを伝え合う。 ・地震についての話をする。 ・保育室や園庭など園内の危険な個所について考えるようにする。 （落下物、転倒の危険、倒壊の危険等） ○避難訓練について話し合い、以下のような点を確認する。 ・室内で活動していた場合、電灯、ピアノ、窓から離れる。 ・園庭で活動していた場合、樹木や建物から離れる。 ・揺れがおさまるまで、姿勢を低くして頭を守って待つ。 ・しっかり話を聞く。	・経験したことやテレビ等で見たことをもとに話し合うようにする。 ・恐怖心を与えないようにする。 ・絵本や紙芝居、ビデオなど発達段階にあった資料を活用する。
2. 地震の発生（放送）	・避難の合図の音を聞き、室内にいた場合は上靴のままで避難する。 ・本日用うのは訓練であることを伝える。 ○指示 「あわてず、おちついて」 「安全な場所で、小さくなって手で頭を守りましょう」	・場所によって、避難の仕方が異なることを、確認する。 ・頭を保護し、指示があるまで待つことを知らせる。 ・「おさない・はしらない・しゃべらない」（お・は・し）を守って避難することを認識させる。 ・配慮を要する幼児の避難方法については、教職員間で十分に共通理解をはかる。 ・負傷者の有無の確認をする。 ・頭を保護するものが身近にあれば活用する。

	「揺れがおさまるまで待ちましょう」 ○措置 (室内) ・ 出入り口を開ける。 ・ 電源を切る。 ・ ガスの元栓を閉める。(冬季)	
3. 避難の合図 (放送)	○指示 (室内) 「揺れがおさまりました。園庭に避難します」 「帽子をかぶり、上靴のままで避難します」 「頭の上に気をつけて、走らないで園庭に集まり、組ごとに並びましょう」 (園庭) 「揺れがおさまりました。組ごとに並びなさい」 ※ 火災発生時 「口と鼻をハンカチで覆って避難しなさい」	・ 避難方法を明確に指示し、近くの幼児を素早く安全に避難させる。(室内) ・ 各保育室の子どもたちの状況を確認しながら、園庭へと避難させる。(園庭) ・ 先に避難してきた子どもから誘導し、組ごとに並べるようにする。 ・ それぞれの幼児の行動範囲を把握しておき、特に、保育室内に残っている幼児がいらないか確認する。 ・ 人員確認を行い、園舎裏など死角になるところや保育室に、誰も残っていないか確認する。 ・ 二次避難の場の表示を園外から見える位置に掲示する。
4. 人員確認	○指示 「ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」	・ 担任は人員確認を行い、速やかに本部に報告する。
5. 津波警報の発令 (二次避難)	○指示 「津波警報が発令されました」 「今から〇〇小学校へ避難します」 「頭の上に気をつけて、走らないで先生の後についてきなさい」	・ 津波警報が発令されたことを知らせる。 ・ 二次避難することを伝え、組ごとに、二次避難場所へ避難する。 ・ 地震発生時と同じように、「おさない・はしらない・しゃべらない」(お・は・し)を守って避難する。 ・ 余震の発生の可能性もあるので、移動中も頭上に気を付けさせる。
6. 人員確認	○指示 「ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」	・ 担任は人員確認を行い、速やかに本部に報告する。

7. まとめ	○係の話 ・運動場に移動させる。 ・避難時の行動の態度や避難の所要時間について話をする。 ○地域防災リーダーや消防署の話 ○園長先生の話	・全幼児の安全確認を行い、「おさない・はしらない・しゃべらない」が守れたか、安全に気を付けて避難できたかなどについて話をする。 ・地域防災リーダーや消防署の方に、大阪市で予想される地震や津波、大きな地震が発生したときの状況、その後の生活について等話していただく。また、日常から気を付けておくことについても話していただく。 ・良かった点や注意する点等、話をする。
8. 保護者による引き取りを行う。	○保護者を誘導し、名簿に記入するとともに幼児の名前を呼び、一人ずつ確実に引き渡すようにする。 ・名前を呼ばれるまで座って待つ。 ・保護者と手をつないで降園する。	・引き渡した時刻を名簿に記入する。 ・引き渡しが終了した担任は、本部に報告する。
9. 保護者の迎えのない幼児を把握し園に戻る。	○周囲の情報収集をする。 ・担任と一緒に園に戻る。	・幼児が不安にならないよう配慮しながら、園に戻る。

《その他の留意点》

- 建物崩壊・倒壊などの危険もあるので、避難誘導の際には、様々な被害想定に基づいて計画を立てて実施する。
- 季節や9月1日の「防災の日」、1月17日「防災とボランティアの日」の行事などの関連及び地域の取組や実態を考慮して、訓練の計画を立てる。
- 普段から、幼児の好きな遊びの場所や行動範囲を把握しておくとともに、幼児には、担任の教師だけでなく、園のすべての職員の指示を聞いて行動できるように指導しておく。
- 災害時における幼児の心身のケアについて事前に研修を行っておく。
- 災害に備え、家庭との連絡体制を確立しておくとともに、保護者には、普段から安全な通園路を確認するように啓発しておく。
- 家庭でも、普段から災害に備え、いざというときの心構えについて確認しておくことの大切さを啓発していく。

実践事例 5

1. 対象・・・ 小学校 低学年

2. 指導計画作成にあたっての留意点

小学校低学年においては、地震などの災害に関わる基本的な知識を身に付けるとともに、地震が発生したときに、教員や保護者など近くの大人の指示に従うなどして適切な行動がとれるよう、避難訓練において、災害に応じた行動の仕方を身につけ、安全に避難できるようにすることが大切である。

3. 目標

- 地震が発生したときに、教員や保護者など近くの大人の指示に従うなどして適切な行動ができるようにする。
- 地震のときに起こりうる事態を具体的に知り、どのようにしたらよいかについて知る。
- 危険な状態を発見したときは、身近な大人に速やかに伝えることができるようにする。

4. 関連教科等 特別活動

5. 指導計画（指導の流れ）

主な学習内容と活動	指導上の留意点（教科等との関連）
1. 地震について話し合う。 ・ 地震 ・ 地震による被害	・ 地震について知っていることを出せるようにする。 ・ 地震による二次災害として火災が発生することやこれまでの地震で多くの人が犠牲になったことを知らせる。
2. 地震や地震による火災から身を守るための行動について考える。 ○ 電燈などの落下物や家具などの転倒物から身を守る ○ 地震により火災が発生するのを防ぐ ○ 避難するときに、散乱したガラスなどから身を守る ○ 家などが倒壊する危険から身を守る	・ 地震発生時の状況や地震によってどのような状況が起こるのかについて具体的に知らせ、どのような行動が適切なのかを考えられるようにする。 ・ 考えた行動を自分ひとりでできるかどうかについて考えるようにさせ、大人がいる場合は、大人の指示をしっかりと守って行動することが大切であることに気付けるようにする。
3. 避難訓練をする。 ○ 集団での避難行動の中で大切な「お・は・し」の約束事について考える。 ・ おさない ・ はしらない ・ しゃべらない ○ 避難訓練をする。	・ 事前指導を十分に行い、事後指導の中で教師の指示を守れたか、落ち着いて約束事を守って避難できたかについて振り返られるようにする。 ・ 児童の様子を常に把握し、様々な危険について、具体的に確認しながら訓練を行うことができるようにする。

○消防署の人や地域防災担当の方のお話を聞く。	・事前に話し合った約束事を守れたかについて事後指導をするとともに、消防署や地域の防災担当者の方の講話から、避難時の課題や日頃から気をつけておくことを考えることができるようにする。
4. 家の人とも話してみよう ○家族で話し合ったことを出し合い、家でできる避難の仕方や事前の備えについて話し合う。	・学級だよりや学年だよりなどで、防災指導や避難訓練について保護者に知らせ、家庭においても、地震が起こった場合についてどのようにしたらよいのかについて子どもと話し合うように働きかける。

実践事例 6

1. 対象・・・ 小学校 低学年

2. 指導計画作成にあたっての留意点

小学校低学年においては、地震などの災害に関わる基本的な知識を身に付けるとともに、地震が発生したときに、教員や保護者など近くの大人の指示に従うなどして適切な行動がとれるよう、避難訓練において、災害に応じた行動の仕方を身に付け、安全に避難できるようにすることが大切である。

3. 目標

- 地震が発生したときに、教員や保護者など近くの大人の指示に従うなどして適切な行動ができるようにする。
- 地震のときに起こりうる事態を具体的に知り、どのようにしたらよいかについて知る。
- 危険な状態を発見したときは、身近な大人に速やかに伝えることができるようにする。

4. 関連教科等 特別活動

5. 指導計画（指導の流れ）

主な学習内容と活動	指導上の留意点（教科等との関連）
1. 地震について話し合う ・地震 ・地震による被害 ・二次災害（津波・火災）による被害 ・避難方法	・地震について知っていることを出せるようにする。 ・地震による二次災害として火災や津波が発生することやこれまでの地震で多くの人が犠牲になったことを知らせる。
2. 地震や地震による火災から身を守るための行動について考える。 ○ドアが変形して閉じ込められないようにドアを開ける。 ○電燈や家具、飛散したガラスから身を守るため机の下に隠れる。 ○地震により火災が発生するのを防ぐためガスの元栓をしめる。	・地震発生時の状況や地震によってどのような状況が起こるのかについて具体的に知らせ、どのような行動が適切なのかを考えられるようにする。 ・考えた行動を自分ひとりでできるかどうかについて考えるようにさせ、大人がいる場合は、大人の指示をしっかりと守って行動することが大切であることに気付けるようにする。
3. 避難訓練をする ○集団での避難行動の中で大切な「お・は・し・も」の約束事について考える。 ・おさない ・はしらない ・しゃべらない ・もどらない ○地震による火災が発生したと仮定して二次避難	・事前指導を十分に行い、事後指導の中で教師の指示を守れたか、落ち着いて約束事を守って避難できたかについて振り返られるようにする。 ・児童の様子を常に把握し、様々な危険について、具体的に確認しながら訓練を行うことができるようにする。 ・火災がひどくなった場合、学校の運動場ではな

を行う。(近くの公園や神社など) ○消防署の人や地域防災担当の方のお話を聞く。	く、近くの公園や神社に二次避難することを知らせる。 ・逃げ遅れた児童がいないか人員確認をし、本部に連絡をする。 ・事前に話し合った約束事を守れたかについて事後指導をするとともに、消防署や地域の防災担当者の方の講話から、避難時の課題や日頃から気を付けておくことを考えることができるようにする。
4. 家の人とも話してみよう ○家族で話し合ったことを出し合い、家でできる避難の仕方や事前の備えについて話し合う。	・学級だよりや学年だよりなどで、防災指導や避難訓練について保護者に知らせ、家庭においても、地震が起こった場合についてどのようにしたらよいのかについて児童と話し合うように働きかける。

実践事例 7

1. 対象・・・小学校 中学年

2. 指導計画作成にあたっての留意点

小学校中学年では、地震のときに起こる様々な危険について知り、自ら安全な行動ができるようにすることが大切である。そのため、地震の際の危険について、学校周辺や地域の特性や実態をもとに考えさせ、避難訓練において、具体的な行動場面に潜む危険を考慮して、安全に行動できるようにすることが必要である。また、地域防災リーダーの方の話を聞いたり、消防署等を見学し、消防士の話を聞いたりすることで、地域防災リーダーや消防士の役割や願いについて理解できるようにすることも大切である。

3. 目標

- 今後起こるであろうと予測されている南海地震をはじめとする地震による災害について知るとともに、身の安全を守るために自分や家族がすべきことについて理解する。
- 地震のときに起こる様々な危険について知り、自ら安全な行動ができるようにすることができるようにする。
- 地震等の災害から人々の安全を守る体制が地域にあり、それらの関係者や従事している人々の役割や願いを知り、今後の生活の中で生かしていこうとする態度を身に付ける。

4. 関連教科等 社会科、特別活動

5. 指導計画（指導の流れ）

主な学習内容と活動	指導上の留意点（教科との関連）
1. 地震や地震による火災から身を守るための行動について話し合う。	・地震発生時の状況や地震によってどのような状況が起こるのかについて、写真などの資料を用いて具体的に知らせ、適切な行動について考えられるようにする。
2. 避難訓練をする。 ○想定された地震発生状況での避難訓練をする。	・これまでの学習や避難訓練の経験からどのようなことが大切なのかを確認し、訓練できるようにする。
3. 想定以外の場面で地震が発生した場合、どのような行動をとればよいかについて考える。	・自宅にいるときに地震が発生した場合、登下校時に発生した場合など、具体的に場面を想定して、避難の方法について考えられるようにする。
4. 地域防災リーダーの方の話を聞く。 ・大阪市で予想される地震 ・大きな地震が発生した場合の状況 ・大きな地震が発生した後の生活	・地域防災リーダーの方をゲストティーチャーとして迎え、大阪市で予想される地震や、大きな地震が発生した場合の状況、その後の生活等について話をしていただくようにする。
5. 消防署の見学、体験学習をする。 ○地震による火災の危険について ○けむり体験、消火活動体験など	・地震による火災から身を守るためにどのようなことが大切かについて、見学や体験学習を通して、考えられるようにする。

6. 自分たちの生活の中でできる地震に対する備えについて考える。	・これまでの学習を振り返り、地震のために自分たちができることや家族としての備えについて考えられるようにする。
---	---

実践事例 8

1. 対象・・・小学校 高学年

2. 指導計画作成にあたっての留意点

小学校の高学年においては、地震や地震による二次災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、自分の安全だけでなく他の人々の安全にも気配りができるようにすることが大切である。そのためには、大きな地震時の状況を実感として受け止めさせるとともに、地震により発生する二次的な災害（火災等）が発生する仕組みについても十分に理解させる必要がある。また、大きな地震後の収容避難所での生活について理解するとともに、もしもの避難生活のときに自分たちができることを考えさせる必要がある。指導にあたっては、防災センターでの地震体験学習や貯蔵食料を実際に食す体験等を学習の中に位置付けたり、課外においては、地域の防災訓練に参加させたりすることも重要である。

3. 目標

- 今後起こるであろうと予測されている南海地震をはじめとする地震による災害について知るとともに、身の安全を守る「自助」のために自分たちがすべきことについて理解する。
- 地域防災訓練や体験学習を通して、災害時に適切に対処できる能力を育てるとともに、防災・減災には人々の助け合い「他助、公助」が不可欠であることを知る。
- 家庭、地域で生活することを再認識するとともに、これからの生活の中で自分ができることを考え、実践していく態度を身に付ける。

4. 関連教科等 理科、社会科、家庭科、保健、特別活動、総合的な学習の時間

5. 指導計画

主な学習内容と活動	指導上の留意点（教科との関連）
1. わたしたちの大阪市と地震 ○大阪市や大阪市付近を襲った過去の地震について調べる。 ○地震のメカニズムについて調べる。 ○地震を体感する。 ・阿倍野防災センターでの体験学習 ○大阪市で予想される地震について調べる。	・インターネットで調べたり、家の人に過去の震災の話の聞いたりし、震災の事実だけでなく、その震災のときの様子についても調べられるようにする。（社会科） ・地震のメカニズムについて調べられるようにする。（理科） インターネット 子ども技術白書Ⅶ「指令！地震災害を究明せよ」の活用 ・地震について十分に体感できるように阿倍野防災センターと打合せをし、見学させる。 起震機での地震体験 地震発生時の行動体験 消火器の使い方体験 ・予想される震災の大きさや被害状況予測をもとに話し合い、身の安全を守ることの大切さについて理解を図る。

○家庭や学校、地域における防災の取り組みについて調べる。 ・家庭 ・学校 ・地域	・家庭や学校、地域でどのような準備をしているかを調べ、今後の学習（避難訓練など）に取り組むことができるようにする。
2. 災害が発生した場合に備えること ○避難訓練を実施する。 ・避難訓練の留意点について ・消防署員や地域の防災リーダーからの話 ○避難所での生活を考える。 ・避難生活の様子を映像から ・非常食を食べるなどの体験から ・避難している人々の思いから	・避難訓練が形骸化しないように、事前に地震発生時や避難時の留意点について話し合えるようにする。 ・自分たちの避難の様子について振り返るとともに、消防署員などの関係者から話を聞き、避難時の自分たちの課題について把握できるようにする。 ・避難後の生活について映像などから想像させ、避難生活の不便さや苦勞について理解できるようにする。 ・アルファ米、ハイゼックス米、乾パンなどの非常食を食すことにより、避難生活の不便さを実感できるようにする。（家庭科） ・避難生活の不便さだけでなく、避難している人々の復興への思いについて考えられるようにする。
3. わたしたちにできること ○これからわたしたちにできることについてまとめ、発表する。（3時間） ・我が家の防災について ・地域防災訓練への参加について ・避難生活を強いられたときの自分の行動について ・将来の災害ボランティア活動への参加について	・今までの学習を振り返り、防災・減災のために自分たちができることを話し合えるようにする。 ・家庭や地域の方に来ていただき、発表を聞いてもらって、防災・減災について連携を図ることができるようにする。

実践事例 9

1. 対象・・・小学校 中・高学年

2. 単元名 「安心・安全まちづくり ～守ろう命 考えよう防災～」(総合的な学習の時間)

3. 単元の概要

①単元の目標

東日本大震災について学んだことをもとに、自分の生活を見直し、防災意識を高め、安心・安全なまちづくりのために実践しようとする。

②単元で育てようとする資質や能力及び態度

[学習方法に関すること]

ア 東南海地震が起こるだろうと予想される状況の中から防災にかかわる課題を発見し設定する。

イ 課題解決をめざして見学したり調べたりしたことをもとに考える。

[自分自身に関すること]

ウ 防災意識を高め、自分や家族の安全な生活のあり方を意識し、実践する。

[他者や社会とのかかわりに関すること]

エ 地域の方や友達、家族の考えを受け入れ、地域社会の中での自分の安心・安全な生活のあり方を考える。

③単元で学ぶ内容

ア 津波・高潮についての科学的な理解

イ 自分たちにできる災害への備え

4. 単元の評価規準

評価の 観点	学習方法		自分自身	他者や社会とのかかわり
	課 題 設 定	思 考・分 析	自 己 理 解	他 者 理 解
単元の 評価規準	①東日本大震災の学習をもとに、東南海地震が起きた場合の自分の町の状況を考え、安全を守るための学習活動を構想し、課題を設定している。 [②ーア、③ーア]	①わたしたちの町の震災被害を調べたり、防災施設を見学したりしながら、防災の大切さについて考えている。 [②ーイ、③ーア]	①調べたり見学したりする活動を通して、学んだことを振り返り、防災意識を高めている。 [②ーウ、③ーア]	①聞き取りや見学を通して、友達や地域の方などの考えや意見などを積極的に取り入れている。 [②ーエ、③ーア]
	②自分の防災意識を見つめ直し、安全を守るための学習計画を立てている。 [②ーア、③ーイ]	②避難方法を想定したり、自分の町の防災マップを作ったりしながら安心・安全な生活について考えている。 [②ーイ、③ーイ]	②「自分にできる避難計画」を考え、自分や家族の安全な生活のあり方を意識し、実践しようとしている。 [②ーウ、③ーイ]	②友達や家族の考えを受け入れ、自分の町での安心・安全な生活のあり方を考えている。 [②ーエ、③ーイ]

5. 活動の流れ (全 25 時間)

第1次 もしも大きな地震が起きたら・・・(3 時間)

目標 わたしたちの町を防災の視点から見つめ直し、追究する課題をもつことができるようにする。

主な学習活動	指導上の留意点	評価規準 (方法)
もしも地震が起きたら、わたしたちの町はどうなるだろう ○大きな地震が起きたら、わたしたちの町はどうなるでしょう。 ・古い家が多いから、町がつぶれる。 ・阪神大震災の時のように、高速道路が倒れるかもしれない。 ・地震の後、火事になるかもしれない。 ・海が近いから津波が来るかもしれないよ。 わたしたちの町が受けた被害について調べよう ○これまでにわたしたちの町で起きた地震や津波について調べよう。 ・身近な人に聞いてみよう。 ・図書館で調べよう。 ○わたしたちの町が受けた被害について調べたことを報告し合う。 ・昔から津波や高波の被害が多かったんだね。 ・わたしたちは、どのようにして町や命を守ればいいのか。		・図書館の資料を借り出しておき、効率よく調べられるようにしておく。 ・東日本大震災など過去の大震災の被害についての知識をもとに、わたしたちの町はどのような被害を受けるのか想像させ、学習への意識を高める。 ・阪神大震災については家族や身近な人から聞き取らせ、取材ノートに記録できるようにする。 ・図書館の資料を活用し調べるようにする。 ・阪神大震災や過去の大地震の被害状況がわかる資料を準備し、補助資料として活用できるようにする。 ・聞き取りや過去の実際の資料をもとに、自分たちの町を防災の視点から見つめなおさせ、防災について追究しようとする意識を高める。 思① 製作物による評価 他① 製作物による評価 課① 行動観察による評価

第2次 防災の施設について調べよう。(10 時間)

目標 防災施設を見学し、災害に備えることの大切さを理解することができるようにする。

主な学習活動	指導上の留意点	評価規準 (方法)
防災施設を見学しよう ○防災施設（防災センター・津波高潮ステーション）に見学に行こう。 ・防潮扉を閉める体験をする。 ・大きな台風がきた時の大きな被害につ		・防災施設の見学を通して、水害から町を守るための施設や、いろいろな工夫を知ることができるようにする。 思① 自① 製作物による評価

第1年 防災 防災教育モデルカード		
いて知る。 ・過去の地震と津波について知る。 ・防災グッズについて知る。	・被害を最小限に食い止めるために、科学的な取り組みが行われていることに気付けるようにする。	思① 行動観察による評価
防災グッズを作ってみよう		
○防災施設で教えていただいた防災グッズを作ってみる。 ・ダンボールとビニル袋と古新聞で簡易トイレができたよ。でも、落ち着いて用が足せないな。 ・大きなビニル袋の中に古新聞を入れると布団ができたけれど、冬は寒いだろうな。	・身近な材料を用いて防災グッズを作ることができるが、実際に用いるときには、不便であったり、不自由を感じたりするだろうということを考えられるようにする。	

第3次 わたしたちの町の防災計画を立てよう（12時間）

目標 わたしたちの町の防災計画を立て、安心・安全な町づくりや生活について考えることができるようにする。

主な学習活動	教師のコーディネート	評価規準（方法）
○家族や町の人のために役立つ、防災計画を立てようとする意欲をもたせる。 ・大きな災害が起きたら、どこへ、どのようにして避難すればいいだろう。 ・家族と一緒に安心して暮らすには、どうすればいいのだろう。	・これまでの学習を振り返り、自分や家族、町の人々の安心・安全な生活について考えられるようにする。 ・学校での避難訓練の学習をもとにして、家族や町の人のために役立つマップや避難計画を立てることを確認するようにする。	課② 制作物による評価
自分たちで避難訓練をしよう		
○津波が来たらどこに避難したらよいか話し合う。 ・学校にいる時、家にいる時、どこに行けばいいのかを考える。 ・高い所に避難しないといけないことに気付く。 ・どこに高い建物があるのか調べてみよう。 ○実際に避難してみよう。 ・教室から講堂の上に避難してみよう。 ・家から高い建物まで避難してみよう。	・校区地図を活用し、防災施設で学習したことをもとに、地域にある高い建物を避難場所として想定するようにする。 ・実際に体験することで、避難に必要な時間や、避難経路や避難場所での留意点、危険な箇所について知るこ	

・家の周りに防災に関する設備を見つけたよ。	とができるようにする。	
防災マップを作ろう		
○家の周りにある防災設備について調べる。	・住んでいる地域ごとにグループを編成する。 ・地域防災リーダーの話を聞くことで地域の防災計画について知ることができるようにする。	
○調査した事柄をもとに、自宅やその周辺の防災用施設や設備、避難に適した場所などをマップに書き込み、防災マップを仕上げる。	・校区を超えた生活圏も含めて実地調査したことをマップにまとめることで、地域の状況や課題、よりよい避難の仕方について情報交流できるようにする。	思② 制作物による評価
防災家族会議を開こう		
○自分や家族の行動計画を立てる。 ・自宅周辺の危険な場所について確認する。 ・家族と待ち合わせする場所を決める。 ・避難経路を決める。	・自分の家族にとって必要な避難の条件を考えるようにし、それぞれの家庭にあったマップを作成できるようにする。	自② 制作物による評価
○家族で「防災会議」を開く。 ・避難場所や避難経路を確認する。 ・マップや避難計画について家族の意見を聞く。	・避難計画を修正してもよいことを家族に話し、家族にとってもっともよい避難計画について検討できるようにする。また、意見を記録できるようにする。	他② 制作物による評価
大震災に備えてできること		
○家庭での「防災会議」で話し合ったことや気付いたことなどを報告し合う。	・各家庭での話し合いの結果を報告し合い、避難グッズ、避難先、連絡のとり方などを報告できるようにする。	
○家族での話し合いをもとに、防災マップや避難計画を修正する。	・家族の意見や友達の報告を取り入れて、よりよいマップ・避難計画を作ることができるようにする。 ・安心・安全を視点に振り返り、地域の	自② 制作物による評価

○安心・安全な町作りのため、自分自身も町の一員として、できることを話し合う。 ○防災マップや避難計画を町の人に広げよう。 ・回覧板などで学習の成果を報告しよう。 ・町の人にも配ろう。 ・たくさんの人に見えていただけるよう区役所に置いてもらおう。	人みんなが防災意識をもつこと、お互いに協力して助け合う気持ちをもつことの大切さに気付くようにする。 ・町の一員としての自覚をもって行動しようとする態度を育てる。	他② 行動観察による評価
--	--	----------------------------

実践事例 10

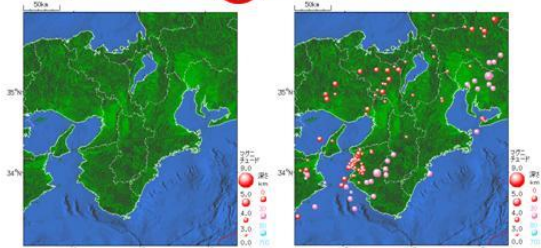
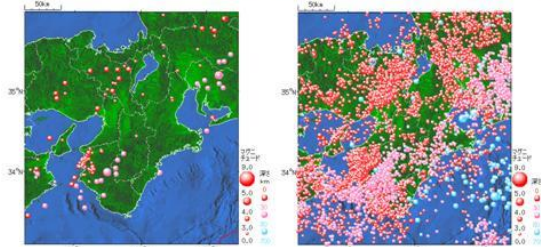
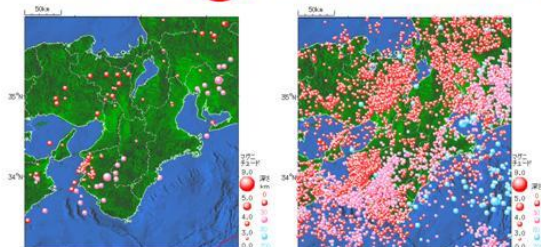
1. 対象・・・小学校 高学年

2. 目標

- 自然現象である地震、津波に対して理解し、大きな地震や津波によって、どのようなことが起こるかを
知り、自分の『命』を守るためにどうすればよいかを考える。

3. 関連教科等 理科

4. 指導計画（指導の流れ）

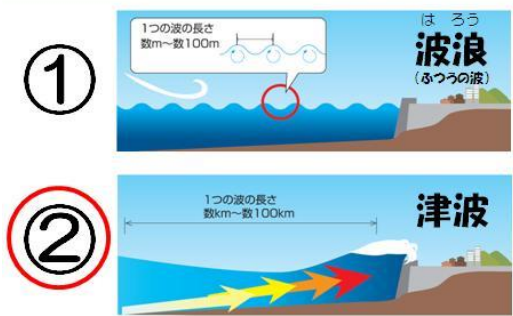
主な学習内容と活動	指導上の留意点	資料
1. 地震について ○ 2012年に、近畿地方で体に感じる地震や地震計だけが感じる地震がどれくらい起きているかを考える。 ○ 南海地震のことを知る。	・近畿地方では、体に感じる地震は少ないが、体に感じない地震は身近でたくさん起きていることを知らせる。 ・歴史的に見れば、東日本大震災のような大地震が近畿地方にも起きていて、近い将来起きる可能性が高いことを知らせる。	体に感じる地震(有感地震) 2012年に体に感じる地震は、何回起きたでしょうか？ ①1300回 ②130回 ③13回  体に感じない地震は何回？ 2012年で・・・ ①160000回 ②16000回 ③1600回  体に感じない地震は何回？ 2012年で・・・ ①160000回 ②16000回 ③1600回 
2. 津波について ○ 津波と波浪の違いを理解し、津波の性質	・津波は、エネルギーが波浪と比べて非常に大きく、	

を知る。

津波は繰り返しやってくることを知らせる。

- 最初の波が、一番大きいとは限らないことを知らせる。
- 波長が長く、進むスピードが深さによって違うため、沿岸部で波が急速に高くなることを知らせる。
- 陸上に流れ込んできた津波は大人ひざ下の高さ（50 cm程度）になると、人が立ってられないことを知る。

はろう
津波と波浪(ふつうの波)はどっち？

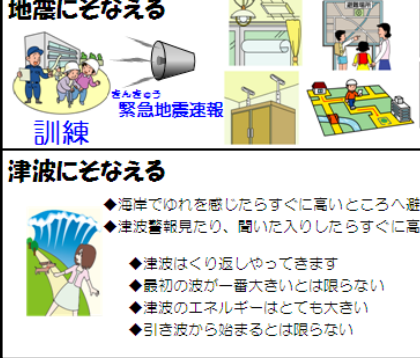


津波の伝わる速さ



津波が沿岸部で高くなるわけ



3. 防災について ○大きな地震について知る。	・大きな地震が起これると、どのようなことが起こるか考えさせる。 ・模型を使い、液状化実験を行う。
○命を守るために、日頃からどのような備えをしておけばよいか、いざというときに、どのように行動すればよいかを考える。	 地震が起きたらどうなる？ もし今、自分たちの地域に関係する地震が起きたら、どんなことが起きると思われますか？ 災害を少なくするには、どんな方法がありますか？ 地震にぞなえる 訓練 緊急地震速報 危険場所の確認 津波にぞなえる ◆海岸でゆれを感じたらすぐに高いところへ避難 ◆津波警報見たり、聞いた入りしたらすぐに高いところへ避難 ◆津波はくり返しやってきます ◆最初の波が一番大きいとは限らない ◆津波のエネルギーはとても大きい ◆引き波から始まるとは限らない

- 資料については、気象庁大阪管区気象台が作成したものである。
- 学習後、「市民防災マニュアル」を活用した防災学習や、地域や保護者、気象庁、消防署等の関係諸機関と連携した取組等につなげて実践を行うことができる。

実践事例 11

小学校

日時	令和○年○月○日（○） ○時○分	
災害の想定	午前○時○分に強い地震が発生。地震による津波発生の可能性があり。安全な場所へ避難する必要がある。	
ねらい	- 地震や津波の恐ろしさを知り、自分たちの命を守るための基本行動を理解し、的確に行動できる態度や能力を身に付ける。 - 地震発生後や津波発生後の避難の仕方を知り、指示を聞いて速やかに避難できるようにする。	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○避難訓練について話し合い、以下のような点を確認する。 - 頭を保護するために、机の下に隠れる。 - 揺れがおさまるまで待つ。 - しっかり話を聞く。 - 避難の合図の音を聞き、上靴のままで避難する。	- 頭を保護するために、机の下に隠れ、指示があるまで待つことを知らせる。 - おさない・はしらない・しゃべらない（お・は・し）を守って避難できるようにする。 - 配慮を要する児童の避難方法については、教職員間で十分に共通理解をはかる。
2. 地震発生	○指示 「しずかに」 「おちついて」 「机の下に隠れてじっとするようにします」 ○措置 - 出入り口を開ける。 - 電源を切る。 - ガスの元栓を切る。	- 大きな声ではっきりと指示する。 - 児童の行動を把握し、落ち着かせる。 - 頭部の安全について指示をし、特に窓やロッカーの近くの児童には、頭部を反対にして机の下にもぐらせる。
3. 避難合図 (放送)	○指示 「けがはありませんか」 「今から運動場に避難をします」 「上靴のままで避難します」 「廊下に静かに並びましょう」 「頭上に気をつけて、走らないで先生の後についてきなさい」 ※火災発生時 「口と鼻をハンカチで覆って避難しなさい」	- 負傷者の有無の確認をする。 - 頭を保護するものが身近にあれば活用する。 - 避難方法を明確に指示する。 - 隣接の学級と協力して、素早く安全に避難できるようにする。 - 人員確認を行い、教室に誰も残っていないか確認する。
4. 人員確認	○指示 「ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」	担任は人員点呼を行い、速やかに本部に報告する。

5. 津波警報の発表 (二次避難)	○指示 「津波警報が発表されました」 「今から3階以上の教室に避難します」 「頭上に気を付けて、走らないで先生の後についてきなさい」	・津波警報が発表されたことを知らせる。 ・学級ごとに、3階以上の教室に移動することを伝え、所定の教室・廊下等へ移動させる。 ・地震発生時と同じように、おさない・はしらない・しゃべらない（お・は・し）を守って避難できるようにする。 ・余震の発生の可能性もあるので、移動中も頭上に気を付けさせる。
6. 人員確認	○指示 「ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」	・担任は人員点呼を行い、速やかに本部に報告する。
7. まとめ	○係りからの話（放送） ・避難時の行動の態度や避難の所要時間について話をする。 ○地域防災リーダーや消防署の方からの話を聞く。 ○校長先生の話聞く。	・全児童の安全確認を行い、おさない・はしらない・しゃべらないが守れたか、安全に気を付けて避難できたかなどについて話をし、児童個々の反省の視点を伝える。 ・地域防災リーダーや消防署の方に、大阪市で予想される地震や津波、大きな地震が発生したときの状況、その後の生活について等話していただく。また、日常から気を付けておくことについても話していただく。 ・良かった点や注意する点等、話をする。

《その他の留意点》

- 建物崩壊・倒壊などの危険もあるので、避難誘導の際には、様々な被害想定に基づいて計画を立てて実施する。
- 季節や9月1日の「防災の日」、1月17日「防災とボランティアの日」の行事などの関連及び地域の取組や実態を考慮して、訓練の計画を立てる。
- 災害時における児童の心身のケアについて事前に研修を行っておく必要がある。
- 災害に備え、家庭との連絡体制を確立しておく必要がある。
- 家庭でも、普段から災害に備え、いざという時の心構えについて確認しておくことの大切さを啓発していく。

実践事例 12

小学校

日時	令和○年○月○日（○） ○時○分	
災害の想定	午前○時○分に強い地震が発生。さらに5分後に地震による津波発生。安全な場所へ避難する。	
ねらい	- 地震や津波の恐ろしさを知り、自分たちの命を守るための基本行動を理解し、的確に行動できる態度や能力を身に付ける。 - 地震発生後や津波発生後の避難の仕方を知り、指示を聞いて速やかに避難できるようにする。 - 地域の方と協同で避難訓練を行うことで地域の防災リーダーともふれあう。	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○避難訓練について話し合い、以下のような点を確認する。 - 頭を保護するために、机の下に隠れる。 - 揺れがおさまるまで待つ。 - しっかり話を聞く。 - 避難の合図の音を聞き、上靴のままで避難する。	- 頭を保護するために、机の下に隠れ、指示があるまで待つことを知らせる。 - おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない（お・は・し・も）を守って避難できるようにする。 - 配慮を要する児童の避難方法については、教職員間で十分に共通理解をはかる。
2. 地震発生	①地震発生。第一指令 「ただいまより、避難訓練を始めます。」 「緊急放送、緊急放送。ただいま○○地方に震度5の地震が発生しました。全員机の下にもぐり、机の足を持ち、静かに身体を守ってください。」 〔放送：教頭〕（非常ベル3回ジージージー） ②児童は机の下にもぐる。教職員は教室のドアを開ける。 【担任は名簿を必ず携帯する。】	- 大きな声ではっきりと指示する。 - 児童の行動を把握し、落ち着かせる。 - 頭部の安全について指示をし、特に窓やロッカーの近くの児童には、頭部を反対にして机の下にもぐらせる。 - 負傷者の有無の確認をする。 - 頭を保護するものが身近にあれば活用する。
3. 避難合図（放送）	③第二指令「揺れがおさまってきましたが、まだ強い揺れがくることも考えられますので、運動場へ全員避難します。先生の指示に従い、避難してください」 ④教室から運動場へ避難する。（赤白帽をかぶる。上履きのまま。名簿をもつ。）	- 避難方法を明確に指示する。 - 隣接の学級と協力して、素早く安全に避難できるようにする。
4. 人員確認	⑤朝礼の隊形に整列。各担任は人数確認して、報告する。	- 人員確認を行い、教室に誰も残っていないか確認する。 - 担任は人員点呼を行い、速やかに本部

5. 津波警報の発表 (二次避難)	⑥津波警報発令。第三指令「津波警報発令、津波の危険性あり。3階以上に避難します。3・4・5・6年は各教室、1年生、2年生は4階へ先生の指示に従って避難してください」	に報告する。 ・津波警報が発表されたことを知らせる。 ・学級ごとに、3階以上の教室に移動することを伝え、所定の教室・廊下等へ移動させる。 ・地震発生時と同じように、「お・は・し・も」を守って避難できるようにする。 ・余震の発生の可能性もあるので、移動中も頭上に気を付けさせる。
6. 人員確認	⑦ 3・4階へ避難。各担任は人数確認して報告。本部は図工室に設置する。 ⑧ 放送。「津波による避難訓練はこれで終了です。一度運動場に集合して校長先生の話をお願いします。」	・担任は人員点呼を行い、速やかに本部に報告する。
7. まとめ	⑨ 運動場に朝礼の隊形で並ぶ。 ⑩ 校長先生の話 ⑪ 地域の方の消火訓練 見学 ⑫ 地域の方の話	・全児童の安全確認を行い、おさない・はしらない・しゃべらないが守れたか、安全に気を付けて避難できたかなどについて話をし、児童個々の反省の視点を伝える。 ・地域防災リーダーに、火災が発生した場合の消火訓練を行ってもらい、その後大阪府で予想される地震や津波が発生したときの状況、地域での避難方法などを話してもらう。

《その他の留意点》

- 建物崩壊・倒壊・火災発生などの危険もあるので、避難誘導の際には、様々な被害想定に基づいて計画を立てて実施する。
- 季節や9月1日の「防災の日」、9月5日の大阪府下「880万人避難訓練」、1月17日の「防災とボランティアの日」などの関連及び地域の取組や実態を考慮して、訓練の計画を立てる。
- 災害時における児童の心身のケアについて事前に研修を行っておく。
- 災害に備え、家庭との連絡体制を確立しておく必要がある。
- 家庭でも、普段から災害に備え、いざというときの心構えについて確認しておくことの大切さを啓発していく。
- 地域防災リーダーとも連携し、児童だけでなく、学校としても地域の避難の仕方について理解する。

実践事例 13

小学校（緊急地震速報を活用した避難訓練）

日時	令和〇年〇月〇日（〇） 〇時〇分	
災害の想定	〇時〇分（休み時間）に強い地震が発生。安全な行動をとり、安全な場所に避難する必要がある。	
ねらい	・緊急地震速報を聞き、身の安全を確保する行動ができる。 ・放送の指示を聞き、安全な場所に避難することができる。 ・自分の避難行動を振り返ることができる。	
内容	教職員の行動及び指示	児童の行動
1. 地震発生	緊急地震速報「ティロン ティロン・・・」（報知音）を流す。（放送） ・教室や教室の近くにいる場合は、教室の出入り口を開ける。 ・ろう下や階段にいるときには、近くの児童に安全な場所に避難するよう声をかける。	・教室等、隠れる場所があれば、机の下等に避難する。 ・運動場やろう下、トイレ等、隠れる場所がない時には、「おちてこない」「たおれてこない」「いどうしてこない」場所に避難する。
2. 避難合図（放送）	「避難訓練。避難訓練。近くの出口から運動場に避難しなさい。」	
3. 人員確認	・近くの児童を運動場に誘導する。 ・配慮を要する児童の確認をする。 ・逃げ遅れた児童がいないか確認する。	・児童各自で、運動場に静かに避難し、学級ごとに整列する。
4. 学級指導のため、各教室に移動	・人員を確認し、本部に報告する。 ・静かに座って待つよう指示する。 ・児童に怪我がないか確認する。	・静かに座って指示を聞く。
5. 事後指導	・児童の様子を確認しながら、教室に誘導する。	・自分の避難行動を振り返る。 ・避難行動を発表し合い、話し合う。
5. 事後指導	・緊急地震速報が放送で流れた時に、どこにいて、どんな行動をとったか発表させる。	

《留意点》

- 緊急地震速報の報知音については、気象庁作成DVD「津波に備える」を活用する。
- 緊急地震速報について、発達段階に応じて事前指導を行っておく。（気象庁ホームページ参照）
 - ・報知音は、誰もが、どこでも、即座に理解できるように統一されている。
 - ・テレビやラジオで流れる。等
- 避難訓練は、児童の混乱を防ぐために、概ねの日程を知らせておく必要はあるが、時間については周知せず「抜き打ち避難訓練」として実施する方が効果的である。

- 災害は、授業中に起こるとは限らないことを念頭におき、休み時間や清掃時間等、様々な場面を設定して行うことが大切である。
- 事後指導では、児童が自分の行動等を振り返るだけでなく、話し合う中で、児童が相互に検証し合うことが大切である。

実践事例 14

1. 対象・・・中学校

2. 題材 「地震に対する防災意識を高めよう」

3. 学習のねらい 地震発生のメカニズムをはじめとして、地域の災害や防災についての基礎的・基本的事項を理解する。

避難訓練や防災体験学習を通して、非常時における危険を認識し、状況に応じて、的確な判断のもと、自らの安全を確保するための行動ができるようにする。

災害に対する日常的な備えや学校、地域の防災被害時のボランティア活動の大切さについて理解を深める。

4. 学習展開の例

主な学習内容と活動	指導上の留意点（教科等との関連）
1. 大阪市における自然災害（地震等）や地震発生のメカニズム等について知る。 ○大阪市（住んでいる地域）における過去の自然災害（地震等）や今後予想される地震（東海・東南海・南海）について調べる。 ○地震発生のメカニズムや危険性等について知る。	・大阪市（住んでいる地域）における過去の自然災害（地震等）や今後予想される地震（東海・東南海・南海地震）について調べ、まとめられるようにする。 インターネットの利用 防災センター、消防署、区役所、図書館等への訪問 地域のお年寄りからの聞き取り 等 （社会科、理科、総合的な学習の時間） ・地震発生のメカニズムや地震が発生した時の地面の揺れ方を理解し、住んでいる地域の土地の成り立ちや地面の地質について調べられるようにする。（社会科、理科、総合的な学習の時間）
2. 避難訓練・防災体験学習について ○安全な避難行動について知る。 ○地震を体験し、防災について学ぶ。	・避難訓練を通して、災害時における安全な避難行動を確認する。 学校で地震が発生した場合、教室、特別教室、廊下、階段、体育館、運動場などを想定して津波が発生した場合、校舎の3階以上に避難する（特別活動、総合的な学習の時間） ・地域の体験型防災学習施設等を利用して、地震を体験させ、防災知識と技術について体験学習する。 大阪市阿倍野防災センター等の活用

	[地震災害体験ゾーン、防災学習ゾーン] (特別活動、総合的な学習の時間)
3. 災害に対する日常的な備えや災害時におけるボランティア活動等について知る。 ○災害に対する日常的な備えについて考える。 ○応急処置の技能を身に付ける。 ○学校、地域の防災や災害時のボランティア活動の大切さを知る。	・非常持ち出し品の準備や非常食等について確認し、日常的な備えについて考えられるようにする。 非常持ち出し品チェックリストの作成 非常食の調理・試食 (技術・家庭科、特別活動、総合的な学習の時間) ・応急手当の実習を行い、災害時の応急処置の技能を身につける。 止血法、包帯法、人工呼吸法 等 (保健体育科、特別活動、総合的な学習の時間) ・自他の生命尊重や社会への奉仕、公共の福祉と社会の発展に尽くすよう努める心の育成を図る。 地域防災マップの作成 地域の防災訓練等への参加 等 (道徳、特別活動、総合的な学習の時間)

実践事例 15

1. 対象・・・中学校
2. 題材 「津波に対する防災意識を高めよう」
3. 学習のねらい 津波に関する科学的な理解を深め、津波災害時の対応の仕方や日ごろの備えについて考えるとともに、応急手当の技能や、地域のボランティア活動に積極的に貢献しようとする態度を身に付けることができる。
4. 学習展開の例

主な学習内容と活動	指導上の留意点（教科等との関連）
1. 防災について講話を聞く。 ○自然災害のメカニズム、災害の要因、過去の災害、災害時の危険、的確な避難行動、日常の備え、住宅の耐震化、指定避難ビル等についての講話を聞く。 ○講話を聞き、気付いたこと、大切なことなどを書きとめておく。	・内容に即して、大阪府、大阪市、区役所、消防署、防災ボランティア等に講師の依頼をする。 ・身近にある災害について考えさせ、防災意識を高められるようにする。
2. 津波に関する知識を深める。 ○津波の起こる仕組みや津波のスピード、被害の程度、遡上の仕方等を資料により科学的に理解する。 ＜班別学習の場合＞ ○習得した知識に基づいて、課題を決める。 ○決めた課題について、各自で調べ学習を行う。 ○調べた内容の発表を行い、津波についての知識を深める。	・防災教育の手引きの資料を効果的に活用し、津波に関する知識を習得できるようにする。 ・調べ学習の課題は、教諭が提示しても、生徒自らが考えてもよい。 ・他の班の発表を聞き、新たな課題を発見させる。
3. 実際に体験し、防災についての知識を深め、技術を習得する。 ○施設を見学し、防災に関する知識と技術を体験を通して理解する。 ○体験した内容と感想を原稿用紙にまとめる。	・防災センターに出向き、事前にセンター内の活動の計画を立てられるようにする。 ・数人の感想を発表させ、いろいろな感じ方があることに気付けるようにする。
4. 災害時の避難行動について考える。 ＜班別活動の場合＞ ○校区を歩きながら、避難する際に注意の必要な個所や避難経路、避難場所、避難ビルなどを校区の地図に記録する。	・班に分け、事前に決めた調査項目をもとに、登下校時の経路を中心に注意個所を確認できるようにする。写真を撮る、メモをとるなど、記録を残すよう指示する。
5. 津波発生時の避難方法について考える。 ○津波警報発令時の適切な避難行動や、周囲の状況についての的確に把握できるよう、「防災マ	・国土交通省 近畿地方整備局 河川部ホームページより「マイ防災マップ・マイ防災プラ

ップ」を作成する。 ○校区を見て回った時に撮影した写真を貼り、注意の必要な箇所や避難できる箇所を確認する。 ○班ごとにマップをもとに、校区を歩き避難箇所を確認する。 ○隣接する他の地区の避難箇所についても確認する。	ン作成の手引き」を参考に利用し、作成できるようにする。 ・撮影した写真を整理し、活用できるように促す。 ・自宅周辺以外の避難箇所について確認できるようにする。
6. 消火活動、災害体験、救急法等の講習を通して初期対応を学ぶ。 ○班に分かれ、消火器の使い方、崩れた建物からの救出、心肺蘇生法、AEDの使い方等を体験する。	・事前に打合せをさせ、班別に分かれて体験ができるようにする。 ・消防署、自衛隊、日本赤十字社などの協力を受け、活動・体験させる。
7. 講話や体験学習を通して学んだことをまとめる。 ○津波発生時にとる避難行動について振りかえる。 ○自他の生命を尊び、地域の一員として地域に貢献できることについて考える。	・今まで作成した資料をまとめる。 ・時間、場所に応じて各自がとれる行動について考えさせ、地域の一員として貢献できることは何かを考えられるようにする。

実践事例 16

中学校

日時	令和○年○月○日（○） ○時○分	
災害の想定	午前○時○分に強い地震が発生し、津波発生の可能性はある。安全な場所へ避難する必要がある。	
ねらい	・地震や津波の恐ろしさを知り、自分たちの命を守るための避難行動を理解し、的確な判断で行動できる態度や能力を身に付ける。 ・教職員の指示を聞き、地震発生後や津波発生後の避難の仕方を知り、速やかに避難できるようにする。	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○避難訓練の予告をする。 ・非常ベル ・緊急放送 ○避難行動について確認する。 ・避難経路 ・集合場所 ○地震発生時の基本行動について説明する。 ・頭を保護するために、机の下に隠れる。 ・素早く出入り口を開け、避難口を確保する。 ・揺れがおさまるまで待つ。 ・教職員の指示を聞く。 ・頭部を保護し、素早く避難する。 ・津波警報が発令した場合、建物の3階以上に避難する。 ・津波がおさまるまで、待機する。 ・津波警報が解除され、安全確認をしてから、余震のため外へ避難する。	・避難訓練の目的・意義等について正しく理解し、真剣な態度で取り組むことができるようにする。 ・過去の避難訓練を振り返り、問題点等について点検する。 ・押さない、走らない、しゃべらないを徹底する。 ・配慮を要する生徒の避難方法については、教職員間で十分に共通理解をはかる。 ・地震発生時、津波警報発令時の基本行動の重要性について具体的に説明する。
2. 地震の発生	○指示 「大丈夫、静かに、落ち着こう」 「机の下に潜り、頭を保護しなさい」 ○措置 ・窓やドアを開け、出口の確保を行う。 ・電源を切り、ガスの元栓を締める。 ・館内放送の避難指示に従い、避難・誘導の準	・大きな声で明確に指示する。 ・窓際、廊下付近の生徒については、ガラス破損による怪我防止のため、離れさせる。 ・沈着・冷静に指示し、生徒の行動を把握する。

	備を行う。	
3. 避難の合 図（放送）	○指示 「落ち着いて机の下から出なさい」 「怪我はありませんか」 「今から運動場に避難をします」 「廊下に出て、静かに並びましょう」 「頭上に気をつけて、走らないで先生の後に ついてきなさい」 ※火災発生時 「口と鼻をハンカチで覆って避難しなさい」	・負傷者の有無の確認をする。 ・頭を保護することが一番大切であることを知らせる。 ・避難方法・場所を明確に指示する。 ・隣接の学級と協力して、素早く安全に避難する。 ・人員確認を行い、教室に誰も残っていないか確認する。
4. 人員確認	○指示 「○年○組は、ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」	・担任は人員点呼を行い、学年でまとめ、速やかに本部に報告する。また、負傷者のある場合は、合わせて報告する。 ・勝手に校外に出たり、帰ったりしないよう指示する。 ・生徒の精神的安定と集団的維持を図る。
5. 津波警報 の発表 (二次避難)	○指示 「津波警報が発表されました」 「今から3階以上に避難します」 「頭上に気を付けて、走らないで先生の後に ついてきなさい」	・津波警報が発表されたことを知らせる。 ・学級ごとに、3階以上に移動することを伝え、所定の教室・廊下等へ移動させる。 ・地震発生時と同じように、「押さない・走らない・しゃべらない」を守って避難できるようにする。 ・余震の可能性もあるので、移動中も頭上に気を付けさせる。
6. 人員確認	○指示 「ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」	・担任は人員点呼を行い、学年でまとめ、速やかに本部に報告する。また、負傷者のある場合は、合わせて報告する。 ・津波警報解除までには時間がかかることが多いため、避難時間が長く、場合によっては1日間避難もありうることを伝える。

7. まとめ	○係からの話（館内放送） ・避難時の行動の態度や避難の所要時間について話をする。 ○地域防災リーダーや消防署の方からの話を聞く。（館内放送） ○校長先生の話聞く。（館内放送）	・生徒の安全確認を行い、「押さない・走らない・しゃべらない」が守れたか、安全に気をつけて避難できたかなどについて話をし、生徒個々の反省の視点を伝える。 《ポイント》 ・目的、意義を正しく理解し、真剣な態度で適切な避難行動がとれたか。 ・協力しながら、安全に避難できたか。 ・避難集合場所での整列、人員点呼、報告などが迅速かつ正確にできたか。 ・地域防災リーダーや消防署の方に、大阪市で予想される地震や津波、大きな地震が発生した時の状況、その後の生活について等話していただく。また、日常から気を付けておくことについても話していただく。 ・良かった点や注意する点等、話をする。 ・地域では、年少児やお年寄りの方などへのボランティア活動に率先して参加し、活動できるよう心がけていくことを伝える。
---------------	--	--

《その他の留意点》

- 建物崩壊・倒壊などの危険もあるので、避難誘導の際には、様々な被害想定に基づいて計画を立てて実施する。
- 季節や9月1日の「防災の日」、1月17日「防災とボランティアの日」の行事などの関連及び地域の取組や実態を考慮して、訓練の計画を立てる。
- 災害時における生徒の心身のケアについて事前に研修を行っておく必要がある。
- 災害に備え、家庭との連絡体制を確立しておく必要がある。
- 家庭でも、普段から災害に備え、いざという時の心構えについて確認しておくことの大切さを啓発していく。また、中学生や高校生が、物資の運搬や、年少児、お年寄りの方などへの心身のケアを行っていき、率先してボランティア活動に参加できるよう指導計画を立てる必要がある。

実践事例 17

地震及び津波による避難訓練（部活動中、休み時間等）

中学校

日時	令和○年○月○日（○） ○時○分	
災害の想定	午後○時○分に強い地震が発生し、津波発生の可能性がある。安全な場所へ避難する必要がある。	
ねらい	・地震や津波の恐ろしさを知り、自分たちの命を守るための避難行動を理解し、的確な判断で行動できる態度や能力を身に付ける。 ・教職員の指示を聞き、地震発生後や津波警報発生後の避難の仕方を知り、速やかに避難できるようにする。 ・教職員が近くにいない場合、自ら状況を判断し避難行動をとるとともに、自助・共助を心がけられるようにする。	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○避難訓練の予告をする。 ・非常ベル ・緊急放送 ○避難行動について確認する。 ・避難経路 ・集合場所 ○地震発生時の基本行動について説明する。 ・頭を保護するために、近くにある台などの下に避難する。近くに避難できる物がない場合、「落ちてこない」「倒れてこない」場所を探し、その場に身をよせる。 ・教室等では、素早く出入り口を開け、避難口を確保する。 ・揺れがおさまるまで待つ。 ・教職員がいれば指示を聞く。近くにいない場合、放送等の指示や周囲の状況から自ら判断し頭部を保護しながら、素早く避難場所に移動する。 ・津波警報が発令した場合、建物の3階以上に避難する。外で活動している者も、	・避難訓練の目的・意義等について正しく理解し、真剣な態度で取り組むことができるようにする。 ・過去の避難訓練を振り返り、問題点等について点検する。 ・「押さない、走らない、しゃべらない」を徹底する。 ・配慮を要する生徒の避難方法については、教職員間で十分に共通理解をはかる。 ・地震発生時、津波警報発令時の基本行動の重要性について具体的に説明する。

	速やかに移動する。 ・津波がおさまるまで、待機する。 ・津波警報が解除され、安全確認をしてから、余震のため外へ避難する。(避難訓練では、再度外への避難は省く)	
2. 地震発生	○指示 「大丈夫、静かに、落ち着こう」 「机の下に避難し、頭を保護しなさい」 ※屋外や廊下等で活動している場合 「落ちてくる物や、倒れてくる物の近くから離れなさい。」 ○措置 ・教室内では窓やドアを開け、出口の確保を行う。 ・電源を切り、ガスの元栓を締める。 ・館内放送の避難指示に従い、避難・誘導の準備を行う。 ・廊下や屋外等では、上から物が落ちてこない、倒れてこない場所を自ら見つけ、身を低くして揺れがおさまるまでじっとしておく。	・大きな声で明確に指示する。 ・窓際、廊下付近の生徒については、ガラス破損による怪我防止のため、離れさせる。 ・沈着・冷静に指示し、生徒の行動を把握する。
3. 避難合図 (放送)	○指示 「落ち着いて机の下から出なさい」 「怪我はありませんか」 「今から運動場に避難をします」 「廊下に出て、静かに並びましょう」 「今から避難場所に移動します。頭上に気をつけて、走らないで先生の後についてきなさい」 ※ 火災発生時 「口と鼻をハンカチで覆って避難しなさい」 ※ 屋外や廊下等では、壁などの倒壊に気を付けながら、あらかじめ決められている避難場所に速やかに避難する。	・負傷者の有無の確認をする。 ・頭を保護することが一番大切であることを知らせる。 ・避難方法・場所を明確に指示する。 ・隣接の学級と協力して、素早く安全に避難する。 ・人員確認を行い、教室や校舎に誰も残っていないか確認（声かけするなど）しながら避難する。

4. 人員確認	○指示 「○○○部は、ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」 ○措置 ・人員点呼する。ただし、部活動中であれば、部活動ごとに、休み時間であれば、学級ごとに整列させ点呼する。	・担任や部活動担当者は人員点呼を行い、部活動ごとでまとめ、速やかに本部に報告する。また、負傷者のある場合は、合わせて報告する。 ・勝手に校外に出たり、帰らないよう指示する。 ・生徒の精神的安定と集団的維持をはかる。
5. 津波警報の発令 (二次避難)	○指示 「津波警報が発令されました」 「今から3階以上に避難します」 「頭上に気を付けて、走らないで先生の後についてきなさい」 ○措置 ・できるだけ混雑を避けるため、分散して階段を利用する。	・津波警報が発令されたことを知らせる。 ・部活動ごとに、3階以上に移動することを伝え、所定の教室・廊下等へ移動させる。 ・地震発生時と同じように、押さない・走らない・しゃべらないを守って避難する。 ・余震の発生の可能性もあるので、移動中も頭上に気を付けさせる。
6. 人員確認	○指示 「ここに並びなさい」 「静かに座って待ちます」	・担任や部活動担当者は人員点呼を行い、部活動ごとでまとめ、速やかに本部に報告する。また、負傷者のある場合は、合わせて報告する。 ・津波警報解除までには、時間がかかる場合が多いため、避難時間が長く、場合によっては1日間避難もありうることを伝える。
7. まとめ	○係からの話（館内放送） ・避難時の行動の態度や避難の所要時間について話をする。 ・災害は、いつ起こるかわからないため、その時の状況を各自が判断し、自らの命を守る大切さを伝える。 ・学校外で、災害が起こった時のことを想定し、通学路での避難場所等についても	・生徒の安全確認を行い、押さない・走らない・しゃべらないが守れたか、安全に気を付けて避難できたかなどについて話をし、生徒個々の反省の視点を伝える。 《ポイント》 ・目的、意義を正しく理解し、真剣な態度で適切な避難行動がとれたか。

	日頃から意識するよう話をする。 ○ 校長先生の話聞く。(館内放送)	・協力しながら、安全に避難できたか。 ・避難集合場所での整列、人員点呼、報告などが迅速かつ正確にできたか。等 ・良かった点や注意する点等、話をする。 ・地域では、年少児やお年寄りの方などへのボランティア活動に率先して参加し、活動できるよう心がけていくことを伝える。
--	---	--

《その他の留意点》

- 建物崩壊・倒壊などの危険もあるので、避難誘導の際には、様々な被害想定に基づいて計画を立てて実施する。
- 季節や9月1日の「防災の日」、1月17日「防災とボランティアの日」の行事などの関連及び地域の取組や実態を考慮して、訓練の計画を立てる。
- 災害時における生徒の心身のケアについて事前に研修を行っておく必要がある。
- 災害に備え、家庭との連絡体制を確立しておく必要がある。
- 家庭でも、普段から災害に備え、いざという時の心構えについて確認しておくことの大切さを啓発していく。また、中学生や高校生が、物資の運搬や、年少児、お年寄りの方などへの心身のケアを行っていき、率先してボランティア活動に参加できるよう指導計画を立てる必要がある。

実践事例 18

1. 対象・・・特別支援学級

2. 指導計画作成に当たっての留意点

特別支援学級における防災教育で大切なことは、まず、障がいのある子どもの状況やニーズを正しく認識し、次の2つの視点をもとに、より適切な防災教育を推進していくことである。

- ・一人一人の子どもの実態に応じた具体的な防災教育を進め、子どもが、自分自身への身近な危険の一つとして災害を認識し、「自分でできること」「他の人からの支援が必要なこと」等、災害から自らの安全や命を守る方法を着実に身に付けられるようにする。
- ・子どもへの防災教育のみならず、災害時の避難や連絡等の安全確保の体制について保護者に周知を図るとともに、地域社会や関係諸機関との連携を図る。

3. 目標

- 地震のメカニズム等、災害や防災について理解することを通して、災害発生時に自分自身の安全を確保することの大切さがわかる。
- 災害発生時の様々な危険を知り、自分自身ができることや他人からの支援が必要なこと等、災害から自らの安全や命を守るために必要な対処の仕方について気付き、災害（地震）発生に備えることができる。
- 災害から人々を守る体制があり、これらに従事する人々の願いや工夫に気付くとともに、自分自身も生活の中で生かそうとする態度を身に付けることができる。

4. 関連教科等 各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、自立活動

5. 指導計画

主な学習内容と活動	指導上の留意点（教科等との関連）
1. 災害（地震）について学ぶ。 ○地震発生のしくみについて理解する。 ・プレート、活断層、内陸部地震 ○これまでに発生した地震について知る。 ・阪神淡路大震災 ・被害の規模や様子 ○震災と人びとの生活について知る。 ・被災した人々の生活の様子 ・発生時の人々の努力や工夫 （地震への日頃からの備え等）	・地震の様子及び災害の様子や発生のメカニズム等について、模型や写真資料や新聞記事等を活用して提示し、防災学習への関心を高めるようにする。 ・一人一人の子どもの障がい状況を踏まえた実態に配慮し、恐怖心だけを与える学習に陥ることのないようにするとともに、日頃からの備えが必要なこと等、自らの安全や命を守ることの必要性への自覚を高められるようにする。 （社会、理科、生活、特別活動、総合的な学習の時間、自立活動）

2. 地震発生時の対処の仕方を学ぶ。 [避難訓練] ○ 自分自身の安全を確かめる。 ・ 安全確保の手立て ・ 危険なものの把握 ・ 自分が必要なものの確認 ○ 地震発生後の2次災害について知る。 ・ 火災発生の防止 ・ 適切な避難の必要性	・ 指示に従い落ち着いて必要な行動ができるように促す。 ・ 地震発生時に、まず身を守るために、「机の下にもぐる」「座布団等をかぶる」「倒れやすい本棚等のそばから離れる」などの注意をし、特に頭部を守ることの大切さを指導する。また、外出時は、「落ちてくるものから頭を守る」「ブロック塀や電柱、電線などの危険なところから離れる」「津波の恐れがある場合は、高い所へ避難する」等、具体的な事象に触れながら安全確保を促す。 ・ 地震では、その後に発生する火災や津波が原因となって大きな被害につながることにについて気付くようにし、発生後の適切な行動の必要性への関心を高められるようにする。 (社会、理科、生活、特別活動、総合的な学習の時間、自立活動)
3. 安全確保に向けた人々の願いに気付く。 ○ 防災学習交流会をする。 [ゲストティーチャー] ・ 保護者 ・ 医師（学校医、主治医等） ・ 施設の方 ・ 消防署の方 ・ 地域防災センターの方 ・ 震災体験のある方 等	・ 災害発生時に安全確保に取り組む人々や安全を願う人々の存在を知り、それらの人々から思いや願いを聞く場を設定する。 ・ ゲストティーチャーには、「安全確保に向けて大切にしていること」「子どもたちに願うこと」等について講話を依頼し、子ども自身が、安全確保の必要性をより自覚できるようにする。 ・ 子どもの安全を確保するために、災害時の避難や連絡等の安全確保の体制について、家庭、地域及び関係諸機関との連携を深める効果的な場となるように工夫する。 (社会、理科、生活、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、自立活動)
4. 防災について振り返る。 ○ 防災学習を通して気付いたことや、今後自分に必要なことをまとめる。 ・ 災害発生時に自分はどうすればいいのだろう？何が必要なのだろう？	・ これまでの学習や生活を振り返り、防災に向けて、今後自分ができることをまとめ、話し合う場を設定する。 (生活、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、自立活動)

■防災教育の実践に向けた支援が必要な児童への配慮事項

①障がいの状況に応じた適切な防災教育

子ども一人一人の実態にを把握し、個々のニーズに応じてどのような支援が必要であるか日常から考えておく。

- 例えば
- ・自分で動くことができず、移動に車いすが必要
 - ・言葉でのコミュニケーションが困難
 - ・何らかの医療的ケアが常時必要

一人一人の障がいの状況は様々であるため、「災害発生時に子どもに必要な支援」や「子ども自身が気を付けるべきこと」等、について、個に応じた防災教育を進めることが大切である。

また、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を防災教育の観点で見直すことも大切である。

これらの工夫によって、子ども自身が防災への関心を高めることにつながる。

②保護者と連携した防災教育

災害が発生したときには、子どもの安全を確保することが、まず大切である。その次に、保護者に対して子どもの安全の状況を適切かつ迅速に伝えることが重要である。

そのためには、「災害発生時の避難体制」、「保護者との連絡方法」等について、あらかじめ保護者と共有しておくことも大切である。子どもの安全確保とともに、保護者が安心できる安全確保の体制を整えることが必要である。

③学校内の状況の再点検をすること

「子どもへの防災教育」、「保護者と連携した防災教育」は、災害発生時における子どもの安全確保の上で大切なことであるが、校内の整備状況も忘れてはいけない。地震がいつ起こるかを予測することは困難だが、地震が発生した時に迅速かつ適切に対応し、より一層の安全を確保するために、日ごろから災害への備えをしておくことは大切である。例えば、「災害発生時にも、安全を確保できる教室環境であるか」「廊下は車いす等が通行できる通路が確保されているか」「緊急時に必要な校内の各種防災設備・機器の状況はどうか」等、今一度、学校内を点検・整備すべきである。

特に、医療機器の電源確保等、「特別な備え」が必要な場合においては、留意する必要がある。

また、緊急時にあわてることがないように利用研修を行うことも必要である。

【参考資料】

「障がいのあるこどものための防災対策」

インクルーシブ教育推進担当
特別支援教育研修・支援グループ

実践事例 19

特別支援学級

日時	令和〇〇年〇月〇日（〇） 〇時〇分～〇時〇分	
災害の想定	午前〇時〇分に強い地震が発生。津波発生の可能性あり。	
ねらい	・地震発生時および津波警報発令の際に、児童・生徒の障がいの状況に応じて、安全かつ迅速に誘導、避難させることができるようにする。 ・災害発生時における教職員の救援体制を確認し、各々が連携して一連の安全確保ができるようにする。 ・子どもの安全状況や家庭等への連絡体制を再確認し、課題を整理する。 （以上、教職員） ・緊急時であることがわかり、教職員の指示に従い整然と行動できるようにする。 ・避難方法や避難場所がわかり、緊急時に適切に行動できるようにする。 （以上、子ども）	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○避難訓練の予告をするとともに、地震やその後の対処について確認する。 ○避難訓練の合図をする。	・子ども一人ひとりの障がいの状況に応じて適切に行動できるように配慮する。 ・必要に応じて、日頃から子どもの状況を教職員間で情報共有できる体制の構築に努める。 ・「押さない、走らない、しゃべらない」を守って避難させる。
2. 地震発生	○校内放送または、非常時連絡設備で、地震の発生を連絡する。聴覚障がい等、障がいの状況に応じて、音声以外の連絡方法について工夫する。 ○「避難訓練。避難訓練。大きな地震が発生しています。教職員は子どもの安全確保をお願いします。子どもたちは、先生の指示に従い、机の下に入るなど身の安全を守りましょう。」と指示する。 ○次の連絡があるまで、静かに指示を待ち、安全確保を続ける。 ○火災発生時の連絡体制の確認を行う。	・子どもの障がいの状況に応じた安全確保に努め、机の下に入る等の身の安全を確保できているかを確認し、子どもがすべき初期避難の行動について徹底できるようにする。 ・緊急な配慮が必要であれば、本部へ連絡する。 ・大きな揺れが収まったら、子どもの安全を確認するとともに、電気や火の元を確認する等、二次災害の防止に努める。
3. 避難合図	○放送または、非常時連絡設備で、避難開始を知らせる。 ○避難の際には、「地震による大きな揺れは収まりました。安全に気を付けて避難を開始してください。<u>お</u>さない・<u>は</u>しらない・<u>しゃ</u>べらないの約束を守りましょう。」と指示する。 ○隣接学級で連携する等して、子どもを	・避難本部を設置する。 ・人員確認に必要な出席簿（児童・生徒名簿）を確保し、持ち出す。 ・個々の子どもに必要な常備薬等を持ち出す。 ・避難誘導班は、避難経路を確保する。 ・避難経路は、原則をもとに状況に応じて適宜変更する等して、子どもの障がいの状況

4. 人員確認	安全な場所へ誘導する。 ○人員確認と報告を行う。（出席数、欠席数等）	に応じた安全確保に努める。 （例：クラッチの使用等子ども自身による移動が困難な場合は、車椅子の使用も含め事前に検討しておく。） ・避難場所支援班は、集合者の誘導・整理、必要な支援を行う。
5. 津波警報の発令 （二次避難）	○「津波警報が発表されましたので、3階以上の教室・建物に避難します。頭上に気を付けて、走らずに移動しましょう。」と指示する。 ○隣接学級で連携し、一人一人の状況を確認しながら安全な場所へ誘導する。	・津波警報が発表されたことを知らせる。 ・3階以上の教室がない場合は、近隣の3階建て以上の建物に避難させる。 ・避難誘導班は、避難経路を確保する。 ・余震の可能性もあるので、移動中も頭上に注意させる。
6. 人員確認	○再度の人数確認と報告を行う。（出席数、欠席数等）	・事前に津波発生時の避難場所について、車椅子での避難が可能か、また安全柵の設置の有無等も含めて確認しておく。
7. まとめ	○「避難訓練でうまくできたと思うことは何ですか？不安なことは何ですか？」と問う等して、所要時間や反省点を整理・確認するとともに、避難訓練を安全にやり遂げたことを称賛し、成就感を味わわせることに留意する。 ○教室に戻り、感想を話し合わせ、次回に生かす。 ○避難訓練をふり返り、災害発生時の自分のすべき行動についてまとめさせる。 ・自分なりにできたこと ・安全、指示に従いできたこと ・不安なこと、支援が必要なこと ○「今回の避難訓練を通して、災害時に自分に必要なことがわかりましたか？」と問う。 ○家庭への連絡体制を確認する。（メール連絡システム等を活用して迅速・適切に行う体制を築く。） ○実際の災害発生時に連絡の必要な関係機関（消防署、教育委員会、医療機関、区役所等）との連絡体制について、確認・点検を行う。	・教室での様子、避難の様子、集合の様子等、子ども一人一人に訓練の様子を伝える。 ・必要に応じて、保護者参加の避難訓練を実施する。 ・事後にアンケートをとる等、避難訓練の成果と課題を見つけ、職員間で課題を共有する。 ・子どもの感想を生かし、今後必要な配慮や体制整備を確認する。 ・関係機関や保護者との連携・連絡を確認する。 ・メール連絡に登録していない家庭への連絡を確実に行う。 ・実際の災害発生時を想定して、保護者への児童・生徒の引き渡し時期や方法についても検討・確認を行う。 ・校内非常時用設備を点検する。 ・避難期間の長期間化を想定し、吸引器の電源の確保等、一人一人の障がいの状況に応じた対応策について保護者等と連携し、検討しておく。

実践事例 20

小学校及び隣接幼稚園による合同避難訓練（冬場を想定）

日時	令和〇〇年〇月〇日（〇） 〇時〇分～〇時〇分	
災害の想定	午前〇時〇分に強い地震が発生。南海トラフ地震（マグニチュード9.0）により、それに伴う津波の発生が予想され、安全な場所に避難する必要がある。	
ねらい	・地震や津波から、自分の生命を守るための基本的な行動を理解し、的確に実行できるようにする。 ・指導者の指示を聞き、速やかに行動できるようにする。 ・隣接幼稚園も参加し、避難経路等の確認を行い、安全に避難できるようにする。	
内容	教職員の指示・措置	留意事項
1. 事前指導	○避難の仕方について ○避難経路の確認	・地震発生と同時に、頭部を保護するために机の下に入り、机の脚を両手で持ち、机の裏を頭で支えて3点で支える。（地震発生時に教室にいた場合） ・ゆれがおさまるまで、その体勢で待つ。 ・次の指示をしっかりと聞く。 ・避難の合図とともに、先生の誘導に従って速やかに避難する。 ・「おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない」の話をする。 ・防災頭巾を使用する。 ・どの避難経路を使用し、どこに集まるのか。 ・今回は冬の避難の為、防寒着を着用すること、二次避難の必要性について十分に理解させておく。
2. 地震発生	○「これから、避難訓練をします。放送をよく聞いて、先生の指示にしたがって行動しましょう。」 ○「ただ今、地震が発生しました。その場で身を守る行動をとりましょう。」 ○「ゆれはおさまりました。先生の指示にしたがって、運動場にすみやかに避難しましょう。」	・机の下に身を隠し、机の脚を両手でしっかり持ち、頭でも支えるよう声をかける。（3点で支える。） ・出入口の確保のため（可能であれば）ドアを開ける。 ・防災頭巾、防寒着を着用し、上靴を履いたまま避難する。 ・担任は防災バッグを持ってヘルメットを被り避難する。 ・避難経路にしたがって、順序よく移動するように指示する。 ・「おさない」「はしらない」「しゃべらない」「もどらない」

3. 避難合図	○「ゆれはおさまりました。先生の指示にしたがって、運動場にすみやかに避難しましょう。」	・防災頭巾、防寒着を着用し、上靴を履いたまま避難する。 ・担任は防災バッグを持ってヘルメットを被り避難する。 ・避難経路にしたがって、順序よく移動するように指示する。 ・「おさない」「はしらない」「しゃべらない」「もどらない」
4. 人員確認	運動場への一次避難 ○2列で整列させ人数の確認をして、担任が教頭に報告。 ※隣接の幼稚園園児教職員も本校運動場に避難。そろい次第、教頭に報告がある。	・避難終了後、直ちに人員確認をする。教頭へ報告する。 (例)「○年○組 欠席△名で 残り□人集合しました。」 ・残留児童の有無を確かめ移動する。 ・人員報告をした先生が、そのクラスの家庭連絡票を取りに来る。
5. 津波警報の発令 (二次避難)	二次避難場所への避難 ○「ゆれはおさまりましたが、津波警報が発令されました。担当の先生方は避難経路の安全確認をお願いします。」	・確認終了次第、直ちに避難を始める。
6. 人員確認	○避難経路図に記入してある担当場所を、担当教員が確認を行う。(通行可能かどうか) ※特別教室の鍵、トランシーバーを各学年・幼稚園に渡す。	・避難終了後、人員確認をし、各学年主任へ連絡する。 ・学年主任は、トランシーバーで本部に連絡を入れる。幼稚園は、内線で本部に連絡を入れる。 ・例「こちら○年生です。避難完了です。どうぞ。」「こちら本部です。了解。」
7. まとめ	○「今から教室でお話を聞きます。順序よく移動しましょう。」	・教室での様子、避難の様子、集合の様子等子ども一人一人に訓練の様子を伝える。

実践事例 21

1. 対象・・・小学校（小中連携による中学生の出前授業）
2. 学習のねらい
 - ・ 今後発生が予想されている、東南海・南海地震とそれに伴う津波に備えるため、学校・家庭・地域・行政が一体となった取り組みを進め、連携を強化する。
 - ・ 各学年の発達段階に応じた防災訓練活動を行い、児童の防災に対する意識を高める。
3. 学習展開の例

主な学習内容と活動	指導上の留意点（教科等との関連）
○防災に関する動画を視聴する。 ・ 防災・減災学習（1～6年） ○地震発生メカニズムや危険性等について知る。	<NHK for school 視聴（10分）> 1年 新ざわざわ森のがんこちゃん 「もしものときのがんこちゃん」 2年 よろしくファンファン 「自然災害とともに生きる～地震～」 3年 ドスルコスル 「どうする？大災害が起きたら」 4年 ドスルコスル 「こうする 災害への備え」 5年 学ぼう BOSAI 「地球の声を聞こう 津波から命を守るには」 <動画視聴（10分）> 6年 「熊本地震」について ※前日までに動作確認をしておく。
○各学年及び各ブースで活動を開始する。 ・ 防災体験学習 【1年】各教室 ①「防災・減災」DVD 視聴 ②「新聞紙でつくる生活用品」（スリッパ） 【2年】 ブース①：DVD（20分間）【担任】 ブース②：水消火器体験（20分間）【消防署】 ブース③：ミニ消防車見学（20分間）【消防署】 【3年】 ブース①：DVD（20分間）【担任】 ブース②：水消火器体験（20分間）【消防署】 ブース③：VRによる疑似地震体験（20分間） 【区役所】 【4・5年】 ブース①：DVD（20分間）【担任】 ブース②：搬送体験（20分間）【消防署】	・ 学級担任で担当する。 ・ 新聞紙は学校で用意する。 ・ あいさつや紹介等は、担任で進行する。 ・ 各ブース 20分間の設定。

ブース③：圧迫救助法体験（20 分間）【消防署】 【6 年】 ブース①：区役所講話（20 分間）【警察署】 ブース②：煙テント（20 分間）【消防署】	
<u>ブース③：中学生による防災出前授業（20 分間）</u> <u>【各教室】</u>	
【めあて】 ○小学校児童・教職員が防災活動に取り組むきっかけ作りとする。 ○防災 ALT（生徒自主防災チーム）の活動報告及び防災・減災の啓発を行う。 ○防災・減災教育の活動を通じて、小中連携を強化する。 ○防災 ALT による授業 ・防災 ALT について ・防災クイズ ○避難に関するピクトグラム 4 種類 ・危険個所ピクトグラム 3 種類 ・自分の住んでいる場所だけでなく出かけた先での避難や危険個所に注意を促す活動を考える。 ○まとめ ・できることからはじめよう！	・防災 ALT 発表用パワーポイント資料（活動紹介動画を含む） ・班に 1 セット、ピクトグラムパズルを準備【準備物】＜拡大ピクトグラム＞ ①避難場所 ②避難所 ③津波避難場所 ④津波避難ビル ⑤津波・高潮注意個所 ⑥土石流注意個所 ⑦がけ崩れ地すべり注意個所
○各教室で、振り返りカード記入する。 ○引き渡し訓練 「ただいまより、引き渡し訓練を行います。保護者の方は、子どもがいる教室に迎えに行ってください。なお、きょうだいがいる場合は、上の学年にお迎えに行ってくださいよう、よろしくお願い致します。学校で待機する児童は（正門）を通過して下校を行います。」 ○学校待機児童はそれぞれ下校する。	・引き渡し訓練について説明する。 ・低学年教室の混雑を避けるためきょうだいのいる児童は、上の学年の教室に移動する。 ・保護者が教室に迎えに来たら、事前に提出された手紙をもとに名前を確認し、児童を引き渡す。 ・待機教室の担当教員引率のもと、正門を通過して下校する。 ・担当している地区を巡視する。